

海越えの花たち

作 長田育恵



■登場人物

風見 千賀(かざみちか)

慶州の両班(貴族)に嫁いだ妻

松尾 ユキ(まつお)

敗戦時、夫に捨てられた妻

笹本 多満子(ささもとたまこ)

戦後、半島へ夫と「帰国」する妻

根岸 あつえ(ねぎし)

動乱時に北朝鮮で夫と子をなくした妻

姜 景達(カンギョンドル/日本名 美谷景達)

李家の家作

李 志英(イ ジョン)

慶州の両班 李家の当主 千賀の夫

姜 声寿(カンソンス)

景達の甥

朴 潤林(パク ユニム)

呉で働いていた徴用労働者、多満子の夫

韓 達三(ハンタルサム)

北朝鮮から逃げてくる元鉄道夫

寺嶋 隆一(てらしま りゅういち)

在釜山日本国領事館職員

朝鮮人男 1

朝鮮回想 プラットホームの男達

朝鮮人男 2

朝鮮回想 プラットホームの男達

学生 1

新宿 ベトナム反戦デモの学生

学生 2

新宿 ベトナム反戦デモの学生

赤松の金

千賀と志英の村、村はずれに住む小作農

街宣員

朝鮮人街宣員

黄

ユキと駆け落ちを約束する農民

ほか

1、新宿 1968

1968年10月21日、新宿、路地裏。23時頃。

この日、ベトナム戦争反対を唱える国際反戦デー闘争が行われ、新宿は熱気に包まれていた。デモ隊が新宿駅を占拠、放火し、警察と衝突。

崩されたデモ隊の学生が指示系統も失い、散り散りに逃げてくる。

「ベトナム戦争反対！ 反対ーッ！」「先輩、合流地点！」「一号館！ 一号館！」……。

ビルの谷間、光の届かない暗がりにある段ボールハウス。

そこに小さくなって座っている浮浪者の女。

学生たち、女にも段ボールハウスにも気づかず走り去る。

寺嶋隆一が来る。

寺嶋 探しましたよ。おい。……おい、

寺嶋、女を確かめる。それは風見千賀。

だが既に肉塊となったもの。その冷たい硬さ。重さ。臭さ。

寺嶋 なあ。生きてたのにな。あんなに生きてた。

寺嶋の記憶に蘇る朝鮮半島の遠い光景。

*

埃まみれで悪臭のするプラットホーム。

日本への引揚者で満員の貨物列車に向かい、物を売る女たち。

女1 (千賀) 담배 사세요. (煙草いららない!?)

女2 (多満子) 물 있어요. 시원한 물! (水あるよ。冷たい水!)

女3 (あつえ) 김밥! 김치도 있어요! (握り飯! キムチあるよ)

女4 (ユキ) 막걸리 어때요? 맛있는 막걸리! (マッコリ! 旨いマッコリ!)

朝鮮人男1 시끄러! 이 쪽마리 새끼! (うるせえ! このチョッパリ女!)

女3 (あつえ) 그래서 뭐! 다시 한번 말해봐! (だから何だ! も一度言ってみろ!)

朝鮮人男2 일본에 돌아가! 쪽마리 녀석! (日本に帰れ! チョッパリの女!)

女1 (ユキ) 닥쳐! 바보 새끼! 담배 있어요! (黙れ馬鹿! 煙草あるよ!)

貨物列車の出発間近を告げる汽笛、大きく鳴る。

女たち、列車の出発直前まで最後の商売に精を出す。

*

路地裏に響く学生たちの叫び。

「バリケードが敗れた。機動隊が来るぞ!」「走れ! 走れ走れ!」

「来いよ戦争だ!」……新宿に渦巻く騒乱。

*

寺嶋 ——あなたは、どっちの国で眠りたい?

貨物列車の発車音。ホームに残される女たち。

2、慶州 1945

8月15日、正午前。

朝鮮半島の古都 慶州。貴族文化が残る古い村。

(架空の名として、青川村とする)

村の中心を占める両班(貴族)、李(イ)氏本家。その座敷と土間。

風見千賀、料理した鍋を持って来る。

家作の姜景達(カンギョンドル)・日本名美谷、裏の豚小屋で豚の世話をしている。

千賀 美谷さん。美谷さん? どこ?

景達 はいはい奥さま。こちらに。

姜、表から来る。肥えの臭いを纏わりつかせて。

千賀 (臭い)——豚小屋?

景達 ああ、すいません。ちっと様子を。例の雌がそろそろ産みそうで。

千賀 そう。十匹産むかしら。

景達 腹の大きさはいいですね。

千賀 でも、あの時の鳴き声は……いたたまれない。

景達 「いたたれ」? 何です?

千賀 なんでもない。何度聞いても慣れないの……人間みたいで。

景達 そうですか? 人間に比べりゃ可愛いもんです。妹が八人の子持ちなんですがね、

あいつは毎度、吠えています。

千賀 ……吠えて、

景達 獣です、まるで。でもそれがいい。あの時は女も豚も騒がしいほうがいい。ウーウ

ーウオーツ……オギャー! ホギャツホギャツホギャツ……! みんな安心。奥さ

まだって、そのうち。

千賀 ……

景達 嫌なら声聞かない、聞こえなくする。何か耳に入れて、

千賀 「詰めて」。耳に詰める。

景達 「詰める」、耳には「詰める」？ ……あ、ご用事は？

千賀 ああ、でも先に水を浴びてきて。臭いわよ。

景達 汚れ仕事ならやっちゃいますよ。

千賀 煮付けを届けて貰いたかったの。

景達 奥さまの煮付け！ 豚、魚？

千賀 魚。

景達 魚の煮付け！ 大好物！

千賀 ありがとうございます。

景達 誰に？

千賀 下の金田さん。

景達 井戸の傍の金田？

千賀 いいえ。村はずれの…赤松が一本ある…、

景達 なんてあの家？ あの家は畑の金、払ってないでしょう。旦那様がいらしたら、とつくに追い出してる。

千賀 けど可哀そうよ。腰が痛くて働けないって。

景達 嘘嘘。怠けてるだけ。きのうも川で釣りしてました。

千賀 知ってる、そこで会ったの。この魚くれたのよ。金田さんね、「おいたわしい」って言うてくれた。

景達 ——「おいたわしい」？

千賀 共に悲しんでいます、って意味。

景達 ヒロシマのこと？

千賀 ええ。

景達 言うてるだけ。金田、言うてるだけです。「おいたわしい」、知らないで言うてる。

千賀 でも嬉しかったのよ。それに…知らないのは私も。ゆうべ、ずっとラジオ聞いてたけど、何もわからなかった。ただひどい、ひどいって。一発の爆弾でたっくさんの人が死んだ。長崎にも落とされたって。

景達 一発？ 爆弾は一発？

千賀 新型の爆弾ですって。

景達 でも一発です。そんなら他の方がずっとひどい。奥さま仰ってた。東京、オキナワ、いろんなところ、何千発。何万発。爆弾が「降りそそいだ」。

千賀 ……ええ、

景達 ご実家からお返事は？

千賀 いいえ。

千賀、天皇の御真影の前に正座し祈る。景達も做う。

景達 大丈夫です。本土は天皇陛下のおわすところ。陛下がご無事でいらっしゃいますから、ご実家もきつとご無事。

千賀 ……、

景達 我ら朝鮮の皇民が元気で本土にどんどん米送る。鉄送る。鬼畜米英困ります。戦争勝ちます。敵の嘘、大げさ、信じちゃいけませんよ。そんなのは「思う甕」。

千賀 かめつて？ ……美谷さんそれ壺！ 「思う壺」でしょ！

景達 「ツボ」？！

千賀 (笑い)

景達 ムツカシイ。甕と壺、同じもの！ なんでダメです？ 第一なんで壺が思います？

千賀 (笑い) ……笑っちゃった。美谷さんのせい。

景達 はいはい、そうです。なんでも私のせい。煮付け、下の金田には届けなくていいですよ。私たち、昼に食べましょう。

千賀 分かったから。水、浴びてきて。

戸口から入って来る背広姿の男。朝鮮総督府の役人、寺嶋隆一。

寺嶋 邪魔をする。ここは、高橋英雄の家か？

景達 そうでございますよ。

寺嶋 あなたは千賀さんか？

千賀 ……はい。

景達 いらっしゃいます。お役人さま、(寺嶋に近づく)

寺嶋 (臭) 朝鮮人！ ——出てろ。

景達 はあ。失礼します。

景達、表へ出ていく。

千賀 ……、

寺嶋 朝鮮総督府の寺嶋と言います。あなたのお父上の知り合いです。

千賀 父の、

寺嶋 大学の柔道部の後輩でした。お父上には大変世話になりました。

千賀 父は、あの、父に何かあったんですか？ 何かご存知でしょうか？ 東京はどうなりました？ 本土は、日本は今どうなってますか？！

寺嶋 お父上のことは分かりません。本土の状況は——千賀さん、時間が無い。よく聞いてください。荷物を纏め、今すぐここを出るんです。

千賀 え？

寺嶋 明日の朝までに釜山港に来てください。帆柱に白い麻布を巻き付けた漁船が泊っています。その船長に、総督府寺嶋の妻だと言います。これを。

千賀

——、
（なおも差し出し）書きつけです。あなたが私の妻だと書いておいた。

千賀 ……あの、何を、

千賀 日本に帰るんだ。帰ってください。

千賀 ——私はもう嫁いだ身です。

千賀 ええ。

千賀 夫は今、戦争に行っています。お国のために戦ってる。

千賀 知っています。あなたのご主人、李志英（イジョン）、

千賀 高橋英雄です。

千賀 朝鮮人だ！ ……あなたを助けたい。

千賀 どういうことです。困ってることは何も……。皆さんいい人ですから。

千賀 やつらのことは私の方が知ってる。信じるな。

千賀 どうして？ 同じ国民同士でしょう？ 皇国臣民の誓い、毎日一緒に唱えています。

千賀 ならば、皇民として、日本がどうなってるか知りたくないのか？ 東京に父上と母

千賀 上の無事を確かめに行きなさい。

千賀 出来ません。夫が戦地に行ってるのに、家を空けるんですか？ 夫が戻った時、誰

千賀 が迎えるんです？

千賀 千賀さん。

千賀 両親は、——私が夫の帰りも待たず実家に舞い戻れば、どう思うでしょう。朝鮮に

千賀 嫁ぐ時、ようよう諭されました。何があっても不平は口にせず、身を粉にして真心

千賀 から婚家に尽くしなさい。今日を限りに他人となり、婚家の娘となる。両親との約

千賀 束です。

千賀 あなたの心がけは立派です。さすが風見さんの娘だ。だが事は急を要する。あなた

千賀 の命が掛かっている。

千賀 夫も命を懸けています。皇民として！

千賀 ……、

千賀 ——日本は危ないのですか？ だから帰れと？

千賀 ……。

千賀 ですが、ここが私の家なんです。夫が帰る家。お引き取りください。

千賀 寺嶋、戸口に向かう。その足が止まる。

寺嶋

……覚えてないかもしれないが。大学の頃、お宅を訪ねたことがある。お父上が医者
を開業された頃で、母屋の縁側でお父上を待っていた。ちょうど春、お庭の木蓮が
満開で——あなたが遊んでいた。あなたはまだ小さくて、草履を蹴って遊んでいた。
何度目か、ポンと草履を蹴り上げて、草履が木蓮の枝に引っかかった。あなたは自
分で蹴っておきながら、わんわん泣いて——私が肩車をしてやった。そうして草履

を取ったんだ。

千賀 ……庭の木蓮。毎年、花が咲くのを楽しみにしておりました。毎年、あの花を……。

寺嶋 ……、

千賀 お訪ねくださり、ありがとうございました。

千賀、寺嶋に丁寧な頭を下げる。

寺嶋、しばし千賀を見つめるが——出ていく。

景達、様子を窺うように入ってくる。

千賀 お帰りになったわ。お昼にしましょう。

景達 はい奥さま。

景達、座敷に上がり、箱膳などを支度し始める。

千賀、ラジオをつける。

ふたり、昼食の支度に動くうち、玉音放送が始まる。

天皇が語るというその知らせに、ふたり直立不動し声を聞く。

景達 ……奥さま、……なんて仰っています？

ふたり、言葉の意味は分からなくても、終戦ということは分かる。

この戦争は負けたのだと。

千賀 ——終わったのね。

千賀、ラジオを消す。呆然と立ち竦んだまま。

景達、箱膳の前に座る。

千賀 ……、（涙が込み上げてきて）

千賀、崩れるように泣き始める。

景達、箱膳を見つめていたが立ち上がる。

景達 キムチ取ってきます。

景達、出て行く。

一人泣いていた千賀、ふと戸口に人の気配を感じる。

そこにはヌツと男がいる。村はずれ、赤松の傍に住む金。

千賀 ああ……金田さん……、昨日はありがとう。よかつたらお昼、

金、土足で座敷に踏み込むと絶叫する。

金 만세ー! 해방 만세ー! (解放万歳!)

千賀 金田さん?! ちよっ……やめて!

金、解放の雄叫びを上げながら、箱膳をなぎ払い、ラジオを奪う。

千賀がいくら静止しようと金の嵐は収まらず、金目の物を探す。

戸口から村の男たちが次々入ってくる。千賀を威圧する雄叫び。

男たち 만세ー! 해방 만세ー! (解放万歳!)

金 三十五年間! あんたらは俺らを踏みつけにした!

金、千賀が着ている着物を奪おうとする。

金 これは俺らから奪った物、これも! 全部返せ! イルボンへ帰れ!

千賀 やめて!

戸口から戻ってくる景達。座敷の狂乱に、水瓶から水を撒く。

景達 그분을 풀어놔! (その女を離せ!)

千賀 助けて!

千賀、金の手を逃れ、景達に縋り付く。

景達、千賀を見下ろす。

景達 ああ、奥さま……「おいたわしい」。さっきの役人と帰ればよかつたのに。

千賀 ……美谷さん?

景達、千賀の下あごに触れ、その目に言い聞かせる。

景達 姜景達 (カン ギョンドル)。私の名は、姜景達です。

その時、銃声。景達が倒れる。

千賀 あ……?!

寺嶋が入ってくる。

寺嶋 朝鮮人ども！ 動けば撃つ！

金 씨발！ 일본 며느라치！（くそつ、日本の役人だ）

金と男たち、寺嶋に反撃の機会を窺う。

千賀は血を流す景達に手を伸ばす。

千賀 あ……あ……！（血を止めようと）

千賀の腕の中、景達の命が失われようとしている。

男たち、寺嶋に飛びかかろうとするところ、寺嶋、威嚇射撃。

千賀 やめなさい。全員下がりなさい。この家でこれ以上の狼藉は許しません。

金 일본사람、(日本人め)

千賀 誰が日本人か！ 私はこの家の嫁です。かつて朝鮮王朝に仕えた慶州青川村、李氏本家。シアボジ・シオモニを看取り、夫の留守を預かる今、私が当主です。夫はすぐに帰ってくる！ 出ていきなさい！

男たち、千賀の迫力、寺嶋の銃を見ている。

寺嶋が銃を構え直すのを機に男たち引く。

寺嶋、男たちが去るまで銃を構え続けている。

千賀 あなたもです、寺嶋さん。あなたはうちの家作を撃った！

寺嶋 日本を捨てる気か？ 後悔するぞ。

千賀 出て行ってください！

寺嶋、銃を下ろすと、戸口から出ていく。

景達のうめき声。

千賀 しっかりして。死なせない。

千賀、景達の傷口をきつく縛り止血を始める。

表では、朝鮮人たちの解放を叫ぶ声が嵐のように。

*

街宣隊の男、檄文を掲げる。

街宣隊 『偉大なる朝鮮民族三千万民衆の名において、日本人に告ぐ。日本人は十月末日までに完全撤退せよ。撤退は諸君の宿命にして絶対義務なり。ただちに釜山に向かい出発せよ！』

*

千賀、景達の手当を終わらせる。

千賀 大丈夫よ。

景達 なんて、

千賀 姜景達。あなたは家族です。

景達 ——奥さま、馬鹿ですねぇ……。

千賀と景達、うつすらと笑みを交わす。

村人たちから略奪に遭う豚小屋。

豚たちの張り裂けるような鳴き声が響く。

3、プラットホーム 1945

貨物列車の停車音。

10月、埃まみれで悪臭のするプラットホーム。

引揚者で満員の貨物列車に、物を売る女たち。

女2 (多満子) 물 있어요. 시원한 물! (水あるよ。冷たい水!)

女3 (あつえ) 김밥! 김치도 있어요! (握り飯! キムチあるよ)

朝鮮人男1 시끄러! 이 쪽마리가! 일본에 돌아가!

(うるせえ、このチョッパリ! 日本に帰れ!)

松尾ユキ、貨物列車の中の乗客たちに縋る。

ユキ ねえ。うちも連れてって! なんでもする。言うこと聞く。好きにしてよかけん!

お願い……!

女2 (多満子) 물 있어요. 시원한 물! (水あるよ。冷たい水!)

女3 (あつえ) 노리마키! 김치도 있어요! (キムチあるよ)

ユキ こん薄情モン! ボケナス! 聞こえんフリばすんな! そんな日本人ね!

ああそうね、ああわかった、あんたら見殺しにするとやね! ……連れてってよオ

……!

貨物列車の出発間近を告げる汽笛、大きく鳴る。

ユキ (陣痛に襲われ) ——ふ、うう……ああああ……!!

女たち、列車が走り出す直前まで商売に精を出す。

列車の発車音。

列車は行ってしまった。女たち、散っていく。

あたりに静けさが訪れる。

ユキ、おおむけに倒れたまま、空を見ている。

千賀、ユキの元へ行く。

千賀 どうしたの？

ユキ ……空、高かねえ……、うろこ雲がぶかぶかしとる。

千賀 ——起きて。こんなとこで寝てたら襲われる。

ユキ ……、

千賀 血？ 怪我してるの？

ユキ さつき。……あそこ。

千賀、ユキが指し示す方を見る。

血が点々と駅構内に続いている。

千賀、様子を見に行く。そこに落ちているもの。

死にながら生まれた、まだへその緒がついたままの赤ん坊。

千賀 ……、

ユキ 息しとらんね？

千賀 ……うん。

ユキ やと思った。静かやもん。

ユキ、うろこ雲を見ている。

千賀、命のない赤子を風呂敷に包み、ユキの元へ抱いてくる。

ユキ、起き上がり、千賀から風呂敷包みを受け取る。

ユキ どげんしよう。とりあえず、これ、どげんかせんとね。

ユキ、風呂敷包みをぶらさげ、ぶらぶらと歩いていく。

しかしホームの先まで歩くうちに倒れる。

千賀　ちよつ、大丈夫？

千賀、ユキに走り寄る。ユキは氣を失っている。

千賀　誰か——도와 주세요！　제발 도와 주세요！（助けて！　誰か手を貸して！）

4、帰国手続きのための陳述書 ①

多満子　名前？　——あんた誰ね。うちらがそんな得体のしれんお人に自分のことベンラベ
ンラ喋る思うたら大間違いじゃけ、

あつえ　……調査ですか？　……領事館？　はあ、ご苦労様です。そんならまあ。한남순

입니다。（韓南順です。）

多満子　日本の名前？

あつえ　……根岸あつえと言います。

多満子　笹本多満子。

千賀　風見千賀です。

ユキ　松尾ユキ。

多満子　本籍地つてなんね？

千賀　戸籍……、

多満子　そがあなと言われてもなあ。

あつえ　戦時中でしたからね……どうなんでしょう。

ユキ　父ちゃんに言われた。嫁行くなら縁ば切る。お前は鬼子たい。

千賀　生まれたのは、東京府荏原郡大森村です。

ユキ　……福岡の大牟田、三池郡玉川村。

多満子　尾道市御調郡美ノ郷村。

あつえ　北海道……虻田郡豊浦町です。

多満子　生まれ年——幾つに見える？

千賀　大正十二年。

ユキ　十三年。

多満子　昭和の三年。

あつえ　大正三年です。

千賀　……なれそめ？

ユキ　忘れました。

多満子　昔のことじゃけえ。

ユキ　……なんがね！　照れとりやせん。

あつえ　北海道の炭鉱です。あの人が徴用で働きに来てて、私は賄い婦をやりました。

多満子　呉。造船所の近くに喫茶店があつて、そこで女給しちよつた。造船所の人たちがよ

う来ちよつてね。あの人はいつつも窓際で詩を読んじよつた。徴用で連れてこられた言いよつた。

千賀 実家が病院でした。夫は留学生で明治大学の学生でした。剣道部で怪我をして、うちの病院に来たんです。私の一目惚れでした。夫は朝鮮の両班（ヤンバン）——貴族階級の出身だと言いました。

ユキ ……炭鉱。筑豊炭田。朝鮮人炭鉱住宅の傍に住んどつたとよ。洗濯もんば洗つてやりよつたたい。そこに背のたこうして、スラアツとしとつとがおつてくさ。日本語もまあまあ上手でから。なんとなく仲良うなつて。

千賀 両班は同じ階級同士でないと結婚できないのが慣習でしたが、あの頃の日本人なら別でした。日本人妻を持てば、出世が約束される。夫から、結婚してくれて感謝する、そう言われました。

多満子 朝鮮に来たんは——、

ユキ 結婚してすぐ。まだ良かった頃やね。昭和……、

千賀 十八、

ユキ 十八年。あの頃はまだチャホヤされとつたね。

千賀 終戦は慶州の自宅で迎えて、

ユキ 負けたらすぐ離縁されてくさ。追ん出されてから。ひとりぼっち。

千賀 轟々と鉄砲水のように引揚げていく人たちを見送りました。終戦から三年、夫の帰りを待ち続けて。

5、慶州 1948

慶州の李氏本家。5月。

高級な調度品は消えている。だが掃除が行き届き、地に足がついた暮らしをしていることが伝わってくる。

李家所有の水田で田植えの日。

千賀、田植えの村人たちをもてなすため家事に追われている。

平カゴに湯飲みを積み上げ、ヤカンにマッコリを入れる。

景達、声寿を伴って表から入ってくる。

景達 奥さま、村の連中だいたい揃いました。そろそろ始めます。

千賀 ご苦労様。こっちもすぐよ。

景達 運びましょう。声寿。

千賀 （見覚えが）

景達 妹のこの長男です。声寿と言います。半年ほど前に戦争からやっと戻りましたので、手伝いに呼びました。

声寿 （小さく頭を下げる）

千賀 覚えてる。結婚式の日に来てくれたわね。よくご無事で。（手を取る）

声寿 (手を外し、礼を)

千賀 あなたはその——どちらに？ 朝鮮の兵隊さんと一緒に一緒だった？

声寿 満州でした。朝鮮人部隊でしたが、旦那様のことは存じ上げません。

千賀 そう。お戻りになって半年？ 戦争が終わってからは……？

声寿 ——、

景達 さあさあ、早く掛からないと日が高くなりますよ。今日中にうちの田植えをやっつけちまいますからね。

声寿、平カゴを持って先立って出ていく。

景達 失礼します。

千賀 私もすぐ行く。——여러분 잘 부탁드립니다! (皆さん、よろしくお願いします!)

景達、出て行きながら、田植え歌を口ずさむ。

座敷の奥から、ユキが来る。寝起きの寝乱れた姿。

千賀 おはよう。ユキちゃん。

ユキ おはよう。

千賀 遅かったね。ゆうべ、どうかした？

ユキ ー？

千賀 夜、目が覚めたら、ユキちゃんいなかったから。

ユキ ああ、ちようど厠に行つとつたんやない？ それよか何、今日なんかあると？

千賀 今日はほら、田植えの共同作業の日。

ユキ そうね。また一年経つたたい。

千賀 ユキちゃんの朝ごはん取つといてあるから。私、田んぼに行ってくるわ。

ユキ 働きモンやね。

千賀 決まりだからね。田植えは一軒ずつ全員でやる。その家の人はもてなす。

ユキ 小作なんやけんやらしときゃよか。

千賀 言い方。ねえ、こないだも姜さんに洗濯物干して貰つてお礼言つてなかったよね？

ユキ そげんやったかいな？

千賀 家族なんだから。朝鮮人も日本人も対等なのよ。

ユキ (笑う) そげなもん、とつくに消えとうやん。千賀さんの頭ン中だけ、まアだ花畑たい。

千賀 違うわよ。同じ村人同士、助け合つて、

ユキ そりゃこん家が貴族さまやけんたい。こげな田舎の小さか村。そのうち旦那が帰つてくるつちやないかねって、どつかでまだみんながビクついとる。やつたら開き直つて、上と下、ハッキリさしといた方がまだよか。

千賀 ユキちゃん？

ユキ あんた恵まれとうと。世間をしらんとよ。

千賀 どうしたの今朝は。

ユキ いい加減目エば覚まし。この夏で敗けてから三年。そしたら終わり。目くらまはは解ける。

千賀 ——、

ユキ ……旦那、帰ってこんかもしれんね。もう英霊になりんしゃって、

千賀 よして！ 言っていいことと悪いことがあるでしょう！ いくらユキちゃんでも、

ユキ 大声ださんで。寝不足やけん。

韓国語の田植え歌が風に乗って聞こえてくる。

千賀 あの人は帰ってくる。強い人だから。

ユキ やけんそう思っとつちやろ、みんな？ やけえあれたい（歌）。よかねえ。あんたの

旦那さんは今もこがあして目くらましば掛けて今もあんたを守ってくれとる。うちの薄情モンとは大違いたい。

千賀 田んぼ行ってくる。

ユキ 知つとう？ 来月で日本人の引揚げは完了てたい！ 釜山の日本人世話会も解散するて。

千賀 え？

ユキ 昨日、手紙出しに行ったらご丁寧に教えてくれたばい。イルボンサラム、さつさと帰れって。ね、千賀さん。うちと帰ろ？

千賀 ……一人で行って。

ユキ これが最後の機会かもしれん。荷物纏めてうちと釜山に、

千賀 お金は貸せない。悪いけど。

ユキ 旦那戻らんかったら、あの歌が別のもんにな変わって、全部うちらに向くばい？ ぞつとする！

千賀、出て行った。

ユキ、苛立つ。韓国語の田植え歌にたまらなくなる。落ち着かな

いが、朝ごはんの握り飯を見つけたので囁る。

戸口にこっそり様子を窺う村の男、黄（ファン）。

ユキ ——ああ、あんた！ 来てくれたん？！

黄 ……、

ユキ 誰もおらんけん。大丈夫。入って！ 朝ごはん食べたね？ はい。

ユキ、黄に嚙りかけの握り飯を渡す。黄、食べる。

ユキ 今日、村の人みんなで共同作業の日なんて？ あんた、抜け出してから、いかんね？

黄 (詰まる)

ユキ ばってん、こちらが逃げるとにはびつたりの日やね。——ゆうべ、素敵やったー。うち、あげなと初めて。あげん立派なものも。天国見してもらうた。うちと一緒になつたら意地悪な奥さんやらすーぐ忘れさしちやる。うちがいつばいあんたに尽くす。

黄、ユキを抱く。

ユキ ね、お金持ってきてね？ ソウルに連れてって？

声寿、戸口からヤカンを持って入ってくる。

声寿 서울에는 안 갈거지？ (ソウルには行かんדר？)

ユキ・黄 !

声寿 이 년 돈만 빼먹고 부산에 달아날거야. (この女、金を奪って釜山に逃げる気だ)

黄 이 건……저……아니에요. (これは……その……違いますから)

黄、口の中で何か言いながら出て行く。

ユキ ちよつと！ 待って！

声寿 無駄だ。おまえは金を奪い、釜山に逃げる気だと教えてやった。

声寿、空のヤカンに瓶からマッコリを注ぎ足す。

ユキ (声寿を睨み)

声寿 なりふりかまわんな。日本のメス犬。

ユキ あんた誰。見らん顔やけど。

声寿 姜景達の甥だ。

ユキ へえ。家作の甥がこん家の人間は侮辱するつたい？ 千賀さんに言うばい。

声寿 俺も村の連中に言おう。この家の女は主人をもう待っちゃいない。他の男を連れ込んでる。

ユキ 待って、

声寿 村の連中を裏切って。

ユキ 堪忍して。違うと、うちは帰りたくて。

声寿 (振り払い)

ユキ だってそうやる？ どげんすればいい？

声寿 触るな。チョッパリが！

ユキ なん——ね……？ そげん……そげん日本人が汚いんか！ 悪いとはあんたらやないね！ あんたら男、朝鮮の男がうちば騙してこげなとこまで連れてきたつちやないね！ 甘いこと言うて惚れさして、戦争負けたらサッサと捨てて……なんね、うちが悪いんか！

声寿、金を出し、札を一枚、ひらりと捨てる。出て行こうと。

ユキ

うちは——うちはね、こっちへ来る時、勘当されたんよ。父ちゃんに、恥知らずの鬼子が！ って怒鳴られてね、この類ば往復張られた。それで「金輪際、家に迷惑掛けません、もう帰りません」、紙に百編書かされた、百編……！ あんたらのせいで親に捨てられたんよ！

声寿 幸せだな？

ユキ ああ？！

声寿 つまり自分で決めてここへ来たんだろ？

ユキ それは——やけん騙されて、

声寿 俺たちは先祖代々の土地を奪われた。名前を奪われ、言葉を奪われた。同じ国民だと言われ、皇国臣民に祭り上げられ、死に行かされた、身代わりとして！ 俺は満州で肉の盾となった。挙句見捨てられ、ソ連に連行された。

ユキ ……ソ連……？

声寿 ……冬を二度越えた。足の指が三本落ちた。何度も殺してくれと思った。二年経って樺太に連れて行かれ、そこから帰ってきた。半年寝付いて、今も夢に見る。おまえらが何もかも奪った。꼭마리 새끼！（チョッパリセッキ！）

景達 声寿。

戸口にいる景達。

声寿

삼촌、（おじさん）

景達 この人に謝らせれば気が済むのか？

声寿、ヤカンを持って出ていく。

ユキ、どうしたらいいかわからない。立てなくなる。

ユキ

……うち、

景達 どうしようもない。

ユキ ……、

景達 声寿だけじゃない。私たち朝鮮人（チヨソンサラ）と、日本を許せません。たとえ千年掛かっても消えない恨（ハン）——恨み、刻まれた。でもあんたもそう。フルサトを捨て、男に裏切られ、子どもを亡くした。あんたも、一生消えない恨みを抱えている。

ユキ ……ああ、そうたい。

景達、韓国語でカトリックの祈りを神に捧げる。

ユキ あんた、アーメン？

景達 隠す必要なくなりましたから。

ユキ 神さまやらおらんかったとよ。

景達 それはあんた方の神さまだ。…顔、洗ってきたらどうです？ ひどい格好だ。

ユキ ねえ。うち、やっぱりここで生きてくことはできん。日本人と朝鮮人が一緒に居れるわけないんよ。

景達 そうですか。あんたが出てくのは歓迎です。でも勘違いしないでください、それはイルボンへのハンじゃない。あんただから。あんたは…（言葉を探し）ダニ。ノミ。

ユキ は、

景達 自分で自分、養わない。他のものにくつついて吸いとるだけ。貧乏に、朝鮮人、日本人、関係ないでしょう。生きたい者はみんな働く。がっしり根を下ろす。でもあんたは違う。

ユキ だ——なんが出来るかと？ 外じゃもう誰も日本語使ってくれん。雇ってくれん。うちだって…、

景達 帰れるならいい。お元気で。

景達、手拭いなどを取りに座敷へ入っていく。

ユキ ……、（景達を睨み）

ユキ、床に落ちた札を拾い上げる。

風呂敷に荷物をまとめ、出て行く準備をする。

最後に御真影があった仏壇に置かれた小箱を取る。

中に入っているのは赤ん坊の遺灰。

ユキ ——、

戸口にいる男、この家の主人、李志英（イジョン）。

志英　누구야? 우리 집에서 뭐 해? (誰だ? 人の家でなにをしている?)

ユキ　え? 何?

志英　この家の者はどうした?

ユキ　あんた、誰……?

景達、座敷から出てくる。

景達　어르신! 어르신! (旦那様!)

志英　경달아 이제 들어왔다. (景達。今、戻った。)

景達、土間の物を持って表へ走り出る。打ち鳴らし、

景達　奥さま! 旦那様です! 旦那様がお戻りになりました!

어르신이 돌아오셨습니다! (旦那様がお戻りになりました!)

景達、志英の荷物を預かり、上着を脱がせる。

ユキ、どうしたらいいか分からず、座蒲団を出す。

外から駆け込んでくる千賀。その目はみるみる潤んでいく。

千賀　ご無事のお戻り、お待ち申し上げておりました。千賀は……千賀は……、

志英　(日本式の敬礼をする) —— 帰ったよ。

千賀　……はい。

志英　留守をよく守ってくれた。アボジとオモニは?

千賀　亡くなりました。シアボジはあなたが征かれてすぐでした。シオモニは三年前、終

戦の年の春でした。

志英　—— 아이고! 「アイゴ」

千賀　お二人とも最期まであなたのお帰りを……、

千賀、志英、ともに縋り合うように。

志英　景達、酒だ。墓に挨拶してこんとな。

景達、どぶろくを渡す。

景達　旦那様。

志英　(受け取り) 川べりを行こう。昔みたいに。

千賀 はい。

志英と千賀、寄り添って出て行く。

景達、二人を見送り、志英の荷物を持って奥へ。

静かになった座敷に、田植えの歌が明るく聞こえ始める。

ユキ、のろのろと荷造りの続きをする。

荷物の中から落ちる、出しそびれていた手紙。

声寿、入ってくる。土間に平カゴを片付ける。

声寿 まだいたのか。

ユキ ……、(手紙を拾い上げ)

声寿 ……、

ユキ ……うち、この三年、父ちゃんに何通も何通も手紙ば出してた。許して、帰らして。

うちが悪かった——ばってん……ばってん……父ちゃんから返事が来んと。……たつたの一言も返事が来んとよ……。

土間にうずくまったまま、外への一步が踏み出せないユキ。

声寿、マツコリを煽る。

田植えの歌、朗らかに響きつづけている。

6、帰国手続きのための陳述書 ②

寺嶋 緊張しないで。朝鮮に渡ってきたのはいつですか？

多満子 渡ってきたいうか……「帰国」じゃね。

あつえ 夫と一緒に「帰国」。

多満子 うちが来たんは、戦争が終わってから。うちはずっとあのまま日本におりたかったんじゃけど、大韓民国ができたじゃろ？ 亭主がついに自分の国ができたんじやって喜んで喜んで。

あつえ 朝鮮半島に来たのは戦後です。夫が敗戦国の国民にいるより、独立国の国民の女房の方がずっといいだろって。……なんも言えませんが、あの顔を見たら。……いえ、「帰国」したのは、朝鮮民主主義人民共和国です。……あの頃は「北向き」の風が吹いてるなんて言われてましてね。仙崎から軍用船に乗りました。

多満子 密航じゃった。漁師に、何人かで金を払って漁船を出して貰うたんです。

あつえ 一般客の乗れないその船に、どうして乗れたのかは分かりません。真夜中の出港でした。地下の物置に押し込められて。油の臭いと潮の匂いが混じって気持ち悪かった。

ピストンの大きな音が潰れそうで、

多満子 けどその漁師が釜山への行き方が分からんで。船が流されて。よりによってアメリカ

の軍艦に見つかった。アメリカ人が聞くんよ、「アーユージャパニーズ？ コリヤン？」「うちらは叫びました。「コリヤン！ コリヤン！ コリヤン！」そしたらアメリカの軍艦はうちらを解放して、釜山への行き方を教えてくれたんよ。あつえピストンがいよいよ早く大きくなって、船が港から出て行くのが分かりました。岸壁から離れるのが分かった瞬間、引き返したい！強く思っつて。自然と涙が零れてきて、多満子——思えばあん時、日本を捨てたんじゃろうかねえ。

寺嶋 それは、いつのことでした？

7、慶州 1950

慶州の李氏本家。 6月24日。

(翌日の午前四時から北朝鮮による南侵が始まる)

千賀と景達、畑仕事から帰ってきたばかり。共に荷解きする。

千賀は早咲きの木槿(むくげ)の花を摘んできた。

景達 奥さま、ムグンファ(無窮花)。

千賀 ええ、川の傍で咲いてたの。

景達 まだ六月なのに。

千賀 色が濃い。たぶん今朝咲いたのよ。

景達 今年は夏が早く来ますね。

ユキ(声) 그림 정말 아래 부타해. 준비 됐으면 알려줘!

(じゃあ荷車よろしく。用意できたら教えて！)

表では、ユキが村人たちと働いていた。

ユキは元豚小屋をマッコリの密造工場にしていた。

千賀、木槿の花を壺に活けはじめ。

ユキ、マッコリの甕を一つ持って土間に入ってくる。

千賀 ユキさん、お疲れさま。

ユキ ああ、お帰り。

景達 手伝いましょう。

ユキ 師匠！

景達 な、

ユキ ああ師匠！ うち、とうとうやった！

千賀 どうしたの？

ユキ さつき、うちのマッコリに初めて大口の注文が入ったんよ！

千賀 そう！ おめでどう！ この甕まること？

ユキ ううん、これはうちで飲む分たい。出荷するとはドーンと！ 豚小屋にある一二個！ 今出せるもんは全部たい！

千賀 ええ？！

ユキ 今、荷車の準備頼んだとこ。準備できたらすぐ出発たい。こないだどぶろくタダでバラ撒いたとが鯛になって帰ってきた！

景達 タイ？ いいですね、今夜は煮付け！

ユキ あ、鯛はないったい。

景達 はい？

ユキ いいから師匠。今夜ご入り用だそうで、急な注文なんです。味見お願いします。

景達 熟成期間は……三ヶ月？

ユキ はい、ぎりぎり三ヶ月は経ってます。どげんでしょう？

ユキ、運び込んだ甕から景達と千賀に注ぐ。

景達 いいですね。私は好きです。

ユキ やった！

千賀 美味しい。スッキリしてる。

ユキ そうおおく？！ 苦節二年。長かった。あんときの師匠のダニ呼ばわり、

千賀 (むせる)ダニ？

ユキ ノミやったかいな？

千賀 姜さん？

景達 (もう一杯)

ユキ あのおかげで、うちの隠れた力が、

景達 やっぱりあの豚小屋が酒造りにいいんでしょな。

ユキ ……そうやね！ 温度と湿度とか、よか塩梅なんやね！ ちよつと臭かどが玉に瑕ばってん。

景達 あ、それ。言いますね。「タマに瑕」、どんなタマです？

ユキ ハア？

景達 「たまご」のタマ？ 「みたま(御霊)」のタマ？ 「たまたま(偶然)」のタマ？

ユキ タマタマ言わんで。知らん。

景達 またまた、

千賀 宝玉。

ユキ・景達 へ？

千賀 だから宝の玉。

景達 ほう。おたから……つまり金のタマ、

ユキ やーらしかー。千賀さんやらしかー。

千賀 えっ？！ 何？

ユキ　　そういや、ゆうべも声、聞こえてきたばい。

千賀　　声って——やッ。

ユキ　　お盛んですな。おかげでうちは寝不足たい。

千賀　　ひどい……。

ユキ　　どっちが？　ねえ、どっちが？！　ああもう、うち豚小屋で寝ようかいな。

志英、入ってくる。

志英　　賑やかだね。

千賀　　あなた。

志英　　ああ、ムグンファ。早いね。

志英、千賀が活けていた花の匂いを嗅ぐ。

千賀、乱雑に残りを活けて、志英から逃げる。

志英　　どうした？

千賀　　いえ！

ユキ　　旦那様、ご報告です。うちのマツコリに初めて大口の注文が入りました。甕一二個です。

志英　　そう。それはすごいね。注文はどこから？

ユキ　　駅の近くの陸軍さんの会館です。今夜、アメリカさんば大勢招いて大宴会をやるそうです。で、急遽うちにも注文が。

志英　　どうしてうちに？

ユキ　　噂を聞いたそうです。青川村の李氏本家、日本人妻が酒ば作りよる。

千賀　　私そんな、

ユキ　　ごめん、うちがどぶろく配るとき名乗ったと。

千賀　　日本人て？　わざわざ？

ユキ　　朝鮮の人らは思つとるやろ。日本人が憎い。日本人を恨む。日本人は許せん。でも

女なら！　今、この国に残つとる女は、朝鮮人と生きとるんよ。日本人が許せなくても、女まで憎んどるとはそうおらん。……前は威張り腐つとった日本人が、今はどうかこの国の味を作ろうと頭下げて這いつくばつとる。うちをいくら下に見てくれてもよかとよ。うちは踏んづけながら、それでも一滴飲んでくれたら、うちの勝ちたい。

千賀　　韓国軍とアメリカさんが日本の女の酒を飲み干すのね。

ユキ　　そげんたい。高笑いで飲み干すとよ。

志英　　——君たちのことはこの村の連中なら知ってるが……。

千賀　　なにか？

志英 ……景達、豚小屋に鍵はあったか？

景達 外から門（かんぬき）はありますが、

志英 今すぐ鍵をつけないさい。門に南京錠では足りない。家と同じように、外と中、両方から掛かるように。

景達 は。

賀 そこまで嚴重に？

志英 ……こないだ会館の近くで陸軍の軍用トラックを見た。兵士は機関銃を持った重装備だった。

千賀 どうして？ 戦争が終わって五年も経つのに。

ユキ ……もう日本は戦いの相手やらできんとにね？

志英 二年前、やっと俺たちの国ができた。大韓民国。でも俺にはそうは見えない。主人が日本からアメリカに変わっただけのこと。ユキさん、俺は日本という国を軽蔑はしてるが、まあ、分かる。俺が明治大学に留学してた頃から、日本は西洋に肩を並べようと哀しいほど必死だった。古い良さを捨てたりふり構わなかった。やり方があまりに愚かで……自分たちの誤りも正せなかった。……だが李承晩（イスンマン）は、この国の大統領になりながら、トルーマンの顔色だけ気にしてる。やつはアメリカ人の一員として朝鮮民族を支配したがつてる。金日成（キムイルソン）もそうだ。スターリンに褒められたくて仔犬のように必死だ。独立国が聞いて呆れる！……誰も、朝鮮民族を見ていない。民族の未来！——せめて、この村だけは。旦那様、鍵は今すぐ手配してきます。

景達、志英に頭を下げ、出て行く。

千賀 日本で——あなたが大学の剣道部で初めてうちの病院に来たときのこと、覚えてる？

志英 千賀が包帯を巻いてくれた。

千賀 そう。その時あなた、この村のこと話してくれた。ふるさとと美しい村で、きれいな川が流れてる。夏が来ると川沿いにむくげの花がたくさん咲く。いつか私にも見せたいって。

志英 ……

千賀 ここへ来たらね、あなたの言ったことは本当でした。ううん、もっと綺麗だった。私もここを守りたい。

志英 （千賀を抱き寄せ）

ユキ あーあーあー。うち、出荷の準備してくっかな。

潤林 안녕하세요. 실례합니다. (こんにちは。失礼します。)

ユキ 네ー. (はい。)

朴潤林（パクユニム）、日本からの旅装で入ってくる。

潤林 여기서 막걸리를 판다고 들었는데요.

（こちらでマッコリの販売をしていると聞いたのですが。）

ユキ マッコリ？ 네！막걸리 있어요！（はい！マッコリあります！）

潤林 あんた！あんたが日本人？

ユキ ……、

志英 見慣れない方だが、どちらから？

潤林 日本から。昨日やっところちに着きました。私の妻も日本人です。きんさい、

戸口から、同じく旅装姿の笹本多満子、入ってくる。

小物などからどこか日本を感じさせる佇まい。

多満子 失礼します。

ユキ ……日本人？

多満子 はい。

千賀 日本から来たの？ 昨日？

多満子 はい。昨日釜山に。お二人も日本の方？

千賀 そうよ。そう……！！

千賀とユキ、それぞれ多満子の手を取る。

多満子、がくんと力が抜ける。

千賀 ちよっ、

ユキ ええ？！

多満子 ごめんなさい、ほっとしたら腰が抜けて……、

ユキ なんか飲む？ お茶？ お酒？

多満子 お酒を。

ユキ、多満子にマッコリを注ぐ。

潤林 この家のご主人ですか？ 朴潤林と申します。

志英 李志英。

潤林 初めまして。ずっと日本で働いちよりました。

千賀 徴用で？

潤林 はい。一八歳で日本に行き、広島の大にある造船所で働いちよりました。妻とはそこで。

多満子 笹本多満子です。

千賀 タマちゃん？

ユキ おたからのタマだ。

潤林 そうです。私の宝物。私を信じて一緒に帰国してくれました。

多満子、マッコリをじっと見ている。

多満子

……この人の故郷じゃけえ、帰る場所ができたんなら迷いませんでした。じゃけど、人目を忍んで日本を出て、着いたらどこでもじろじろ見られるんよ。じろじろが冷たい剣山みたいで。でも、釜山から列車でここへ来て、駅で弁当を買ったんです。その売り子は、じろじろだけじゃのうて、話しかけてきたん。他にも日本人の奥さんがおる。酒を作っちよるって。私、思わず列車を降りてしもうて。

ユキ このお酒よ。この国のお酒でマッコリっていうの。

多満子、意を決して飲む。

多満子 美味しい。

千賀・ユキ ……、(安堵)

多満子 お願いします。こちらのこと聞かせてください。

千賀 その前に、日本のことを話して。

景達、入ってくる。

景達 ユキさん、村の連中が、荷車の準備ができたって。

ユキ ぬああっ。そうやった！ すぐ行くけん。

千賀 二人ともよかったら今夜はここに泊まって。まず疲れを癒やして。

志英 (頷く)

潤林 (志英に) 감사합니다。 (ありがとうございます。)

多満子 ありがとうございます。

8、ラジオ 1950

寺嶋、ラジオを持って現われる。

寺嶋

その日、松尾ユキはマッコリ十二壺を、えっちらおっちら陸軍まで運んでいったそ
うだ。赤土の道はデコボコして、ユキは、酒が零れないか、壺が割れないか、さぞ
やきもきしただろう。だが、結果から言えば、そんな心配はいらなかった。代金は
後日支払われる約束だったが、その約束は、翌朝には誰の頭からも消し飛ぶ。

寺嶋のラジオ、北からの電波をうまく拾わない。
李家の座敷では、酒を囲んで夜を徹して語り合っている。

多満子 本土はね、……ひどかったです。でも戦いは本土には上陸せんで終わって。沖縄は、そりゃあむごかったって。……兵隊じゃのうて、なんの罪もない子どもも女学生さんも殺されて、自害して。

志英 東京は？

多満子 真つ黒焦げの、のっぺらぼう。大きい街は、ううん街だけじゃあない、なんもない村や山や、田んぼにまでB29は爆弾を落としていきよった。B29が真つ青な空を幾筋も飛行機雲を曳いて飛んでいくんじや。

千賀 広島は？

景達 一発の爆弾。

潤林 ええ。一発のピカ……地獄でした。……あれは……あの景色はほんま……。わし、その日、広島に出とったんです。仕事での、日本通運の皆実町支店の車庫におったんです。突然真つ暗闇になって、車庫が倒れて腰を打たれました。爆弾が炸裂する音は聞いた記憶がありません。わしやあ無意識に車の下に潜とった。気がつくとき、辺りの様子がおかしくて。あちこちから呻き声が聞こえ始めました。車から這い出ると、爆風で服が全部吹き飛ばされて真つ裸になった人たちが歩いとるんです。皮膚がつま先から垂れ下がって——赤黒い体液がだらだら流れとる。幽霊です。かろうじて生きとる幽霊の群れ。

ユキ ……うちが知つとる日本は、もう、のうなつてしもうたんやね。

千賀 お父さん、お母さん、こっちに呼んでたらよかった……、

多満子 ほんまに、なして誰も教えてくれんかったんじやろ——うち、防空壕入りながら、どしてこがあなことになつとるんか、こんな目に遭うんか全然分からんかった。沖縄の次は本土で一億総玉碎じやって言われたけん、次はうちらが死ぬんじやろうなつて。戦争つちゅうのはその国の全員が死ぬまで終わらんのかなつて。うち、阿呆じゃけど、こがいに恐ろしいことなら、うちら誰もやりとうなかつた。なんで最初に教えてくれんかったんじやつて。

志英 ……でも、戦争は終わった。

千賀 生きて帰ってきてくださった。

潤林 わしもなんとか生きとりますし、多満子も。

多満子 (頷き)

ユキ 生き残った人たちは元気なん？

潤林 はい。あちこちにブラックだの闇市だの。こがな旨い酒はないけど、カストリなんて臭い酒ならある。

多満子 ひどいけど、とにかく生きとる。これ以上ひどいことはもうなかるうつて。それに

ね、歌が流行りました。

千賀 歌？ どんな？

多満子 女の子が歌う歌。

多満子、「リンゴの唄」を口ずさむ。

千賀 ……明るいね、

ユキ うん——。なんやろか、リンゴの気持ちで……、

千賀、ユキ、今聞いた歌を口ずさむ。

突如、ラジオから切り裂くようなノイズ。

金日成の演説——「親愛なる同胞諸君！ 我ら朝鮮人民軍は、祖国の荣誉と自由と独立を守るため、正義の戦いに決起する」……。

多満子 何……？

志英 ——金日成だ。北が、攻めてきた。

景達 ソウルの放送局を乗っ取ったんですか？ まさか。

声寿、飛び込んでくる。

声寿 라디오 들으셨어요？

김일성이예요. 그놈들 남한을 재내들 남한을 다 먹으려고…….

(ラジオ聞きましたか。金日成です。やつら南を支配する気だ)

(笑い) ……장난 치지 마. 무슨……, (冗談でしょう。何を血迷って……)

志英 ——、

景達 こちらにはアメリカがついてるんですよ！

寺嶋 北が南に勝てるわけがない、誰もがそう思った。だが、北にはソ連軍の最新鋭の武器

器装備があり、南には、米軍のおそまつな使い古ししかなかった。侵攻開始から、

三日目。ソウルは陥落した。

遠く聞こえ始める爆撃の音。

寺嶋、ラジオを持って去る。夜の行く末を見つめながら。

声寿 旦那様。俺の村では、明日の朝、男たちが発つことになりました。韓国軍に合流し

ます。この村にも号令を掛けてください。共に行きましょう。

志英 ……나가서 얘기해! (外で話そう)

千賀　ここで話して。私たちにも分かるように。

ユキ　そうよ。うちはね、この酒は朝鮮人に飲んで貰うために作ったんよ。こん国の味、そげん言うて貰うために。あんたらだけの話やないんよ。いつだって割食うのは女たい！

声寿　——やはり外で話しましょう。これは民族の問題です。

潤林　……朝鮮民族……、

多満子　（潤林を掴む）

志英　——金日成は祖国解放の戦いと言ってたな。

声寿　なら、こちらは統一です。祖国統一のために戦う。

ユキ　名前やらどげんでんよか！　要は殺し合いたい。

多満子　……ほんまに殺し合うんですか？　同じ民族同士で。

志英　——侵略されてる事実がある。ソウルが落ちたなら、敵は釜山を目指して一気に南下するだろう。釜山までは、忠清南道（チュンチョンナムド）から慶尚南道（キョンスンナムド）に入って、太田（テジョン）、大邱（テグ）、そしてここ慶州（キョンジュ）。時間の問題だ。

景達　ですが……（なおも笑おうと）どうして？　アメリカが出てくればひとたまりも無い。そんなの分かっている。赤ん坊の腕。（赤子の手をひねる）

志英　北にはソ連と中国がついている。アメリカが動かないわけがない。

千賀　また大戦に？

潤林　見せ掛けなら？　宣戦布告は見せ掛けなんじゃ。ほんまに戦うわけじゃない。ソウルを押さえ、侵略はここで終わり。ただ交渉の材料としてソウルが必要じゃった。

千賀　交渉って何の？

潤林　さあ。でも聞く価値はあると思います。日本におるとき、北には地上の楽園が生まれるんじやて聞きました。

ユキ　——地上の楽園……？

潤林　なんもかも新しい国です。資本家はおらん労働者の国家。すべての人間が平等で、差別されん。誰もが食うに困らん。嘘じゃない、ほんまにそがあな国ができるんじやと。

多満子　北へは大きい船が出とったね。

潤林　わしも故郷が南じゃなけりや……、

声寿　——日本帰りか？

潤林　そうです。徴用で。やっと帰ってこられました。

声寿　なら黙ってる！　반卒마리「반チョッパリ」！

景達　声寿！

声寿　パンチョッパリ、おまえは戦場で戦ってない。ぬるま湯に浸かってた。

潤林　！　わしが？！

声寿　命も晒さず、日本人に尻尾を振るだけ。楽だったな？

潤林 おまえ——何が分かるんじゃ！ わしがどんな目に！ 替われるもんなら替わっちゃる！ 差別され、働かされ……逃げられん……奴隷の暮らし！ それにこれ……網膜に焼き付いとる、これ……！ 一生消えん……！ おまえにやりたい……！
(潤林を抱く)

声寿 ——喜んで取り換える。……血の記憶と……シベリア……！

多満子・潤林 ——、

声寿 旦那様、俺は知ってる、北を知ってるんです……！ ソ連軍に抑留されたとき、俺たちの中から通訳に北の者が選ばれました。俺は訴えた。「俺たちは強制されて日本軍に放り込まれ、中国軍と戦いシベリアに抑留された。俺たちは被害者だ。加害者じゃない。あんたたちは労働者の政府を作ってるんだろう、なのにどうして同じ労働者を痛めつける？」聞いても答えはない、食事を抜かれるだけでした。収容所から朝鮮人が解放される時も、立ち会ったのは北の者です。朝鮮人捕虜ひとりひとりが北か南、どちらに帰りたいか聞かれた。北と答えた連中の待遇はずっと良くなった。でも南と答えた俺はもつとひどい扱いを受けました。拷問するのは北の奴ら。俺が北と言うまで責め続けるらしかった。俺はひたすら……オモニの顔だけ思い浮かべて……！

景達 (声寿に触れる)

声寿 北の宣伝は嘘です……あれが北のやり方なら俺は窒息する。窒息しながら生きるよ、死んだ方がましだ……！

爆撃の音は地を這うように少しずつ近づいている。

多満子の笑い声。

多満子 ……なんか……ねえ……違っちよるよね……？ 聞いとったんとずいぶん違っちよるけん……帰ろ、潤ちゃん……？

潤林 多満子、

多満子 釜山に戻って漁船乗ろ？

潤林 ……、

ユキ できんよ。

多満子 じゃけどどちらは……来たばかりじゃし……皆さんとは、

ユキ 同じたい！ 今ここに居るなら、あんたはもう朝鮮人ばい。

多満子 違います、

ユキ 朝鮮人たい！

多満子 ……、

千賀 日本と朝鮮はね、もう国交がないの。徴用で日本に連れてきた朝鮮人は帰国させる。

でも逆はない。分かってたでしょ？

多満子 ……っ、

ユキ 泣かんで。うつとおしい。

多満子 ——、(荷物を抱き寄せ)

潤林 ……じゃが、運がいいんかもしれん。

千賀 ——え？

潤林 多満子、パンチョッパリ。意味を知つちよる？

多満子 (首を振る) ……、

潤林 釜山着いてからずっと言われとつたよのう？

多満子 (頷く)

ユキ チョッパリは豚の足たい。あんたが履いとる足袋。な？ 日本人のことたい。

潤林 パンチョッパリは半日本人。わしは日本に行きとうて行つたんじゃない。わしだつ

て被害者じゃ。じゃが、同じ被害者の朝鮮人が、日本帰りをどう思つとるかよう分

かった。さんざん差別されて帰ってきたのに、ここでもまた差別される。だったら

簡単じゃ。この戦争で戦地に立てば、朝鮮人に戻るんじやろ？

声寿 ——、

多満子 ……潤ちゃん……待って……、

多満子、潤林を見る。

何を言おうと決めてしまった顔がある。

多満子 なんなん……あんた……なんね……！ (荷物を思いきり潤林に投げる)

潤林 こがいな戦争、どうせ続かん！ ソ連と中国が来るまでもない。一瞬じゃ。戦争は

一瞬で終わる。たったの一発でいいけえ……。わしらはその間、時間稼ぎするだけ

じゃ。

多満子 ……嫌じゃわア……！

潤林 連れてきた女の一生が掛かっとる。わしはあんたと行く。旦那様。お願いがありま

す。戻るまで、多満子をここへ。

志英 構わないが。いいのか？

潤林 ——日本人ならあの戦争で死んでも、まあ……目的のために尽くしたと……満足が

あつたじやろう。じゃが今度の戦争は朝鮮のための戦争じゃ。やっとなの使いどこ

ろができました。

声寿、潤林に手を差し出す。

潤林、手を掴む。多満子はその握手を睨みつける。

千賀、ユキ、多満子に触れる。

志英

俺たちの不幸は、明日を想像できないことだ。俺たちの明日はいつも他人に握られてる。振り回され、命を粗末にされ、使い捨てにされる。民族の未来くらい、民族

で決めようじゃないか。

男たち ——、(頷き)

志英 ……なんにせよ、三八度線まで追いついてからだ。村をまとめよう。

声寿 (志英に頭を下げる)

千賀 ——。

景達 奥さま、マツコリを。

志英をはじめ全員湯飲みを取る。

千賀・ユキ、マツコリを注ぐ。

景達 出発は夜明けですね。

志英 景達。おまえはここにいろ。

景達 ! 旦那様、私は。旦那様がお残りください。

志英 俺が行かんで若い奴にだけ行けというのか? 命令だ。女たちを守ってくれ。頼む。

景達 はい。

志英 (杯を掲げる)

男たちは酒を飲む。

声寿 ! 旨い。

ユキ そおやる?

声寿 旨い。

ユキ うん……。

声寿 어머니를 잘 부탁드립니다。(母さんを頼みます)

景達と声寿、抱き合い、声寿は出て行こうと、

ユキ 死んだらいけんよ。姜声寿。

声寿 あんたの名前は?

ユキ 松尾ユキ。

声寿、出ていく。

泣けてしまう多満子を潤林が抱く。

多満子しがみつく。潤林、多満子を離し、出ていく。

志英、立ち上がる。

千賀

あなた、

千賀、むくげの花を志英に渡す。

千賀　　いつてらっしやいませ。御無事の……お戻りを……。
志英　　行ってくる。

志英、出ていく。

爆撃が徐々に近づいてくる。

景達、残された湯飲みや酒を片づける。

多満子の嘔むような泣き声が響いている。

多満子　……なんでなん……なんでなんよ……！

ユキ　　多満ちゃん。教えちゃる。ここで生きてくコツはね、なんでって思わんことたい。

「なんで」「も」「もしも」も、いいことやらひとつもなか。あんたはもうここに
おる。「なんで」の代わりに「コンチクショウ」たい。

千賀　　……朝鮮の女はね、叩きつけるように泣くのよ。日本の女の耐え忍ぶ涙じゃない。

心から望んで、奥底から欲して、泣き声で爪を立てる。血がほとばしるように。

泣けばいい。思うまま。

千賀　　……アイゴ―。アイゴ―。——아이고―「アイゴ―」！

爆撃音。戦争がこの地を襲う。

女たち悲鳴。

銃声や人々の逃げる気配が押し寄せてくる。

景達　　屋敷は狙われる、豚小屋へ！　早く！

景達、女たち荷物をまとめ、屋敷を捨てて走り出す。

小さな村は戦火に襲われる。逃げてくる避難民たちの群れ。

頭上からの機銃掃射。女たち、一斉に伏せる。

景達、豚小屋を開け、女たちを中に入れる。

景達　　こつち！　빨리 빨리 빨리！（早く早く早く！）

女たち、豚小屋に飛び込む。

再び来る機銃掃射。逃げてきた避難民のうち、足の悪い男が転び、
その妻が継る。

千賀　이리로！（こつちへ！）

避難民の男とその妻らしき女（韓達ニ・根岸あつえ）、豚小屋に飛び込んでくる。遠くから逃げてきたのか、その姿から戦乱の恐怖を物語っている。

景達、戸口を閉める。

女たち、二人を庇うように寄り集まる。

辺りに浴びせかけられる銃弾。

景達、豚小屋の名残の柵板や酒の仕込みの棒などを拾う。

十字を作り、紐で縛る。

千賀　何を、

景達　声を立てちゃいけませんよ。

千賀　姜さん？！

景達、急こしらえの十字架を掲げ、外に出る。

豚小屋を取り囲んでいる兵士たち。一斉に景達に銃を向ける。

景達　총을 내려놔！ 여기는 신의 집이다.

신앙으로 사는 사람들이 피난하고 있어.

（銃を下ろせ！　ここは神の家。信仰に生きる者たちが避難している）

兵士　（構わず撃とうと）

景達　그만해！ 동포여. 제암리를 잊었어？

자랑스러운 우리 군대가 왜놈과 같은 짓을 하는거야？

（やめろ！　同朋よ。提岩里を忘れたか？　誇り高き朝鮮軍が日本兵と同じ真似をするか？）

景達、韓国語で神への祈りを唱え始める。

千賀が咄嗟に両手を合わせ、景達の真似をする。

女たちも千賀に倣い、全員カトリック教徒の振りをする。

兵士の中の一人、銃を下げさせ、別の標的へ向かう。

景達、十字架を持ったまま、辺りの様子を伺う。

多満子　……助かった……？

ユキ　シッ！

あつえ　……日本語……？

千賀、ユキ、警戒して夫婦者を見る。
あつえ、首から神社のお守りを引つ張り出す。

多満子 それ……お守り……！
あつえ ……私……日本人です……！

女たち、あつえ、互いに縋り合つて手を取り合う。
あつえ、温もりに堰を切つたように泣きだすが、

千賀 静かに！

景達、十字架を豚小屋の表に打ち建て戻つて来た。

景達 しばらくは大丈夫でしょう。ここは神の家だと言いました。

千賀 ダメよ、もたない。今のうち出ましょう。

景達 外は危険！

千賀 敗戦の時、神社だつて焼かれたじゃないの！

景達 ——大丈夫です。やつらは教会には手を出さない。やつらには「堤岩里（チエムリ）を忘れたか？」と言つてやりました。

ユキ ……堤岩里（チエムリ）って？

景達 堤岩里（ていがんり）。京畿道（キョンギド）にある小さな村、堤岩里。そこに教会が一つありました。戦前の日本の統治下だった頃です。一九一九年の日本からの独立闘争、そのさなか村の駐在所が襲われて、日本人の憲兵が一人殺されました。怒つた日本兵は、教会に村の大人たちを集めると、入口を塞ぎ、火をつけたのです。村人たちは生きたまま焼かれ、逃げだす者は射殺され、二九人が殺されました。私の父も。——さっきのやつらには、こう言つてやつたんです。「同朋よ、堤岩里（ていがんり）を忘れたか？ 誇り高き朝鮮軍が、日本兵と同じ真似をするか？」……
そうしたら、ほら、行つてしまいましたよ。ここは今から教会です。

千賀 ——姜さん、あなた……、

景達 はい？

千賀 お父さまを日本人に殺されたの？

景達 ええ。残された私は14歳。孤児になり、妹を連れ、ここへ来ました。

爆撃は遠ざかりつつあり、朝が近づいてきている。

景達 ああ、日が昇りますね。真つ白な太陽だ。

景達、手を合わせ、祈りの言葉を口の中で唱える。

女たち ——、（声もなく景達を見つめ）

村のあちこちで、まだ燻っている炎。

遠く響く爆撃。

朝の光、瓦礫と化した村を照らし出す——。

9、東京 1965

東京、寺嶋の自宅。12月下旬。

この年6月、日韓基本条約が締結され、在ソウル在外事務所が開
設された。12月には大使館業務が開始。

寺嶋、外務省の職員として翌年1月開館の在釜山日本国領事館の
設立準備のため、渡航準備をしている。

ラジオからは明るい音楽——「上を向いて歩こう」。

前年の東京オリンピックで爆発的に流行った歌だ。

寺嶋、時折鼻歌を歌いながら、背広を着て、ネクタイを締める。

靴に入れる書類を確認する。記載された項目に、ふと目にとまる。

ある議員からの提案——「在留邦人婦人の帰国支援について」。

寺嶋、書類を靴に入れ、歩き出す。

10、プラットホーム 1965

同12月下旬。

埃まみれで悪臭のするプラットホーム。

満員の長距離列車に、物売る女たち。

千賀 담배 사세요. (煙草いらない!?)

多満子 물 있어요. 시원한 물! (水あるよ。冷たい水!)

あつえ 김밥! 김치도 있어요! (握り飯! キムチもあるよ!)

ユキ 막걸리 어때요? 맛있는 막걸리! (マッコリいかが! 旨いマッコリ!)

プラットホームに降り立つ寺嶋、喧噪に打たれ、既視感を覚える。

寺嶋 막걸리 줘. (マッコリくれ)

ユキ 어머 잘 생겼네! (あら男前たい!)

寺嶋 (金を渡す)

ユキ 자! 흘러지 마요! (はい、零さんでね!)

列車の発車間際の汽笛が鳴る。
女たち、列車の出発直前まで商売に精を出す。

千賀 야! 돈 안 받았잖아! (ちよっと。お金貰ってないよ、お金!)
多満子 어서 오세요! 감사합니다. 아 거기 손님 잠깐만요!

(はい毎度! あ、そっちのお客さんちよっと待ってね!)
あつえ 김치? 하나 남았어! 하나 괜찮아? 고마워요!

(キムチ?! あと一つだよ! 一つでいい? どうも!)

千賀 담배 사세요. (煙草いらない!?)

多満子 물 있어요. 시원한 물! (水あるよ。冷たい水!)

あつえ 김밥! 김밥! (握り飯! 握り飯!)

ユキ 자! 감사합니다 (はい、あんがとね!)

列車は発車する。

女たちは商売をやめて引揚げていく。

寺嶋、女たちとすれ違っていく。

11、慶州 1965

12月24日、夕方。

元豚小屋に打ち付けられた十字架。

現在ここは「ナザレ園」と呼ばれている。

元豚小屋とその前の広場を礼拝堂と居間代わりとし、近くに掘って立て小屋を作り、炊事と居住の場としている。

韓達三(ハンタルサム)、床掃除のためにどかしていた床机を運んでくる。歪んでいる床机を直し、布で拭く。

達三は足が不自由。戦前、鮮鉄の鉄道夫時代の古傷。

景達、水を汲みにいくため桶を持って来る。

景達 달삼아, 열심히 하네. (達三。精が出るね)

達三 원장님청, 소한 거 뿐입니다. 좀 더 일을 시켜주세요.

(園長さん、掃除しただけです。もっと何かありましたら)

景達 잘 하고 있어. 하느님께서 충분히 알고 계셔. (充分。神さまに伝わってる)

達三、十字架を見上げる。意を決し景達を振り返る。

達三 저...원장님...하느님께서는...、(あの園長さん、神さまは...、)

あつえ、駅での販売から帰ってくる。

あつえ 園長さん。達三。

景達 あつえさん、お帰りなさい。早かったですね。

あつえ 今日の分、売り切れましたから。売上は千賀さんに預けてきました。

景達 お疲れさまです。

あつえ 園長さん、これ。ジャガイモ。

あつえ、手売り販売の木箱から泥付きのジャガイモなどを出す。

あつえ 帰り道いただきました。ナザレ園のみなさんでどうぞって。

景達 ありがたい。夕飯に使いましょう。

あつえ あとで千賀さん、お肉いっぱい買ってくるって言ってましたから、カムジャタンにしましょう。

景達 좋네요！（いいですね！）

達三 아이고ー。（お腹が鳴った）

あつえ それから、これ（枝など）

景達 薪？ にしては細いですね？

あつえ 明日、イエスさまのお祝いでしょう？ こうして飾ったら少しは……。

あつえ、枝をリースのようにしたいが、うまくいかない。

達三 十字架に飾りたいのか？

達三、あつえに手を差し出す。あつえ、枝を渡す。

達三は、しなりを試しながら加工しにいくこうと、

景達 達三（タルサム）？ さっき何か言いかけたろう？

達三 いいんです、園長さん。やっぱり神さまに聞くことじゃない。

達三、枝を持って去る。あつえ、達三の背を見送る。

あつえ あの、園長さん？

景達 はい？

あつえ あの、何か？

景達 さあ？ 達三はいつも（探し）……「腹に一物」。

あつえ ……

景達 一物のイチモツってなんででしょう。このイチモツ？ これ男専用の言葉？

あつえ あの！ いいでしょうか！

景達 はい。

あつえ 神さまのことです。…神さまは、本当になんでも見てくださってるんでしょうか？ 私みたいなものも？

景達 もちろん。あつえさんはいい人。働き者、神さま好きです。

あつえ 園長さん、その——達三さんの話なんですけど、私、達三さんから言われてるんです。…明日のイエスさまの日、折り入って話があるって。

景達 折り入ってお話？ ああ！ ついに結婚

あつえ さあ。知りません！ でも、だったらいいと…思ってしまったって…。私、あの六・

二五——朝鮮戦争で家族とはぐれてから、旦那のことも子どものもも一日たりとも忘れてません。あの子の手を離れたことを後悔しない日はないんです。けど、あの瞬間の景色はこんなに焼き付いてるのに…子どもの顔も旦那の顔も、もうぼやけてるんです。今、駅で毎日たくさんの顔を見ます。でも子どもと会えても、私、もう分からないんじゃないかって。私の中のあの子ははぐれたときの四つそのまま…、

景達 お子さんは今生きてたら、

あつえ 十九歳です。

景達 十九…：…そうですか。

あつえ ……二人がどうなったかも分からないのに、私だけはどうして皆さんに救われて。この上、達三さんと夫婦になるなんて。

景達 あつえさん、一つ確認ですが。あなた、北から逃げてくる途中で達三に救われたと仰った。

あつえ はい。

景達 もし達三に言われたとして、命の恩人だから断れない？

あつえ いいえ。…いいえ。

景達 でしたら、私からの返事はこうです。それは罪じゃない。

あつえ ——、

景達 あの六・二五から十五年も経つんですね…。でも、長い時間のようでも傷は癒えません。それどころか、戦争はまだ終わってない。南も北も、勝ったものはおらず、人がぼろぼろ死んだだけ。街も財産も全部焼けて、家族は生き別れ。そんな傷口、治療できない。血が出たままの傷口はますます膿んでひどくなってる。それでも人は幸せになるべきです。生きてかなくやならないから。あなたも達三も遠慮しないで——旦那様も潤林も、ここにいる人はみんなみんな。

あつえ 神さまは許してくれますか？

景達 もちろん。

あつえ ……明日、勘違いだったら笑ってください。たっちゃん六つも年下だし。私も、年ですし。

景達 そうですか？ 私には今のあつえさん可愛く見えます。明日になれば分かりますね。

景達、桶を運んで井戸へ行く。

あつえ、ジャガイモを抱えて炊事場に行こうとする。

人の気配。あつえ、達三かと振り返る。

そこに、寺嶋がいる。

寺嶋 안녕하세요. (こんにちは)

あつえ 안녕하세요. (こんにちは)

寺嶋 여쭙보고 싶은데요 여기에 예전에 이지영씨 저택이 있었죠? 이지영

(お尋ねしたいのですが。ここに昔、李志英氏の屋敷がありましたね？ 李志

英) ——高橋英雄。

あつえ 누구세요? (……どなたですか?)

寺嶋 일본 외무성에서 왔어요. (日本の外務省の者です)

あつえ 日本の、

寺嶋 あなた、もしかして日本の方ですか?

あつえ 아니에요! (いいえ!)

寺嶋 寺嶋といえます。今年、日本と韓国の国交が回復したのは知っていますか?

あつえ ……、

寺嶋 年が明けたら、釜山に日本の領事館ができるんです。私は、残留日本人の調査を、

達三 남순! (南順)

達三、リースを持って戻ってくる。

達三 누구세요? 여기는 나사렛원, 교회입니다. (誰ですか。ここはナザレ園、教会です)

寺嶋 教会? 「ナザレ園」……、

寺嶋、十字架を見る。鞆から文書を取り出す。

寺嶋 年明けから、日本領事館は、大戦後ずっとこの地で過ごしてこられた残留日本人の調査と永住帰国支援を始めます。20年お待たせしましたが、あなたが日本人でしたら読んでください。

達三・あつえ ——、

寺嶋 (文書を置く) また来ます。……メリークリスマス。

寺嶋、去る。

あつえ、呆然としている。

達三、美しく加工されたリースを差し出す。

達三 甘ん(南順)

あつえ

……、

達三 あつえ。

あつえ あ……、

達三 両方あなたの名前だ。好きな方で呼ぶ。

あつえ 南順がいい。あなたがくれた名前。

あつえ、書類を丸めて木箱に放り込む。

達三のリースを受け取る。

あつえ ああ上手。たちちゃんはホントになんでも出来る。

あつえ、リースを十字架に掛け、手を合わせる。

達三もともに手を合わせる。

ユキ・多満子が駅の販売から引き上げてくる。

ユキ 多満子、うちはもう明日から別行動させてもらう。あんたは どげんする？

多満子 ユキさん、

ユキ あんただって腹立つやろ？ 何回目よ？ これ以上、千賀さんにつきあうとは金輪

際ごめんたい！

あつえ お帰り。どうしたの？

ユキ 知らんわ！

達三 夕飯の肉、運ぶよ。

ユキ なか、んなもん！

ユキ、販売の荷物をガチャガチャと片づける。

多満子

今日の売り上げ、千賀さんに全部預けちよったんよ。仕事終わって駅から出たら志英さんがおらんで。探しとったら警察が志英さん連れてこうとしちよるところじゃった。志英さんまた喚き散らしちよって。動けないくせに喧嘩ふっかけとるけん。千賀さん、警察に見逃してってうちらのお金全部渡したんよ。

達三 志英さん、明日から、ここにいてもらったほうがいいんじゃないか？

ユキ あんたがつきつきりで見張ってくれるんならね。ここに置いとぎやうちのマッコリ

狙う、連れてきや面倒ごと起こす。人の言葉で言っても分からん。もう縛り付けとくしかなか。

あつえ
(シツ)

ユキ
疫病神たい。

千賀、志英を載せた車椅子を押してくる。

志英は戦場で負傷し、下半身不随となっており、アルコール依存にも陥っている。

普段は駅で女たちが商売する間、屑鉄拾いをしており、ガラガラと屑鉄が詰まった袋を引きずっている。

千賀
ただいま。

女たち
――。

達三
おかえり。

ユキ
なあ千賀さん、話がある。

千賀
待って。怪我してるの、この人。

千賀、包帯と消毒薬を取りに出ていく。

志英、ぐったりと倦怠感をまとわせながら、笑っている。

志英
ユキ。喉乾いたよ。

ユキ
そげんでしようね。あんだけ喚きやね。

志英
手が震えてる。なあ。なあユキ。

ユキ
うるさい！

達三
部屋までお連れしましょう。

志英
達三。達三。(手を差し伸べ)

達三
はい。

志英
(腕に噛みつく)

達三
アッ！

志英
酒取ってこい！あの女が酒を隠してる。そこにあるんだ。取ってこい！

志英、達三に襲い掛かり、車椅子から落ちる。

達三や車椅子に当たりながら、なおも酒を求める。

多満子
狂つとる。

ユキ
なんか……なんか縛るもん！

あつえ
(探し) これ！

あつえ、繩を持って来る。

達三、暴れる志英をなんとか抑え込み、女三人がかりで繩を掛けようとする。

多満子　なんで動けんくせにこがな力あるん？！

ユキ　(繩)こつち回して、早う！

志英　離せ！　殺す気か？！

あつえ　志英さん！　じつとして！

女たち、後ろ手に縛り終える。千賀、戻って来る。

千賀　何してんの？！　怪我してるとって言ったでしょ。

多満子　千賀さん、

千賀　離れて！

志英　……千賀……ひどいことするよなあ。喉が渴いたんだよ……、

千賀、志英の繩をほどく。

ユキ　——なあ、千賀さん。いい加減にしいよ。あんたが甘やかすけんこの人は分からん

とよ。この人はもう死んどる。戦争で殺されたんや。

多満子　とにかく、お酒を断たんと……。病院に行った方が。

ユキ　なあ、ちゃんと見らな。こん人は——今あんたの目の前におる人はね、昔のご立派な旦那様やなかばい。ただのクズたい。

千賀、屑鉄の袋をユキに向かってぶちまける。

多満子　千賀さん！

志英　(笑う)

ユキ、出ていく。

達三　園長呼んでこい。

あつえ、出ていく。

多満子　もう……なんでこがな……！　うちらずっと仲良うやってきたじゃろ？　こんな

ん嫌じゃけ。千賀さん……！

千賀

——。
どうしました？

潤林

潤林が来る。原爆症（癌）が発症し、身体が衰弱している。

多満子

潤ちゃん。こつち来たらいけん。

志英

よお。死にぞこない。

千賀

あなた。

志英

何出て来てんだよ。死にぞこないじゃないな。死にかけか。

多満子

志英さん。それだけは許せん。二度と言わんで。

志英

なあ、死にかけ。早く死にたいよな。

潤林

——、

多満子

潤ちゃんをあんたと一緒にせんといて！ 潤ちゃんは違う！ 戦つとる！ ピカ

になんか負けんつて一生懸命戦つとる！

潤林

多満子、

多満子

あんたみたいな酒に逃げたりせんけえ！ あんたみたいな弱虫と違う！ 勇気が

潤林

ある人じゃ！ 強い人じゃ！

多満子

いいけえ。大丈夫じゃけえ。

潤林

潤ちゃんは死なん。うちが死なせん。うちの命全部潤ちゃんに——う……、

潤林

（多満子を抱き）ご迷惑お掛けしてすいません。

潤林、志英に頭を下げる。

多満子、潤林の頭を上げさせる。ふたり縋り合うように出ていく。

屑鉄を拾い終わった達三。千賀と志英を見る。

達三

……。 （溜息を）

達三、屑鉄を持って出ていく。

千賀、志英の傷口の治療を終わらせる。

千賀

はい、できた。

志英

止まってる。震え。

千賀

……なんで飲むんですか。

志英

呼ぶんだよ。死んでった奴らが。懐いてくれた部下。アボジ。オモニ。馬鹿みたいに笑い合った仲間——民族の未来をいつまでも語り合った——あの頃の奴らが、あの頃の声で。

千賀 私が呼ぶより強い声ですか？

志英 そうだな。

千賀 ……、

志英 なあ。もういい。——いいんだ。

千賀 何が。

志英 ユキの言ったとおりだよ。これが俺だ。

千賀 人が立ち直るのに決まった時間なんてないでしょ。あなたは優しい人だから、

志英 やめてくれ。……なんの未来もない。立ち上がってもなんにもならない。いくらま

ともになろうとしても、いつのまにか内側からぐずぐずに腐ってく。朝鮮民族！

……これが俺……この国そのもの。

千賀 お酒が抜けたら川に散歩に行きましょう。昔みたいに。

志英 やめろ！ もう、許してくれ。

千賀 ……、

志英 俺はもうダメなんだよ。

千賀 ごめんなさい聞けない。あなたがこうなってるのは私のせいだから。六・二五、あ

のとき私が止めてたらあなたは助かった。

志英 ……、（笑い）

千賀 助かった！ 今度はもう絶対離しません。あなたが嫌だと言っても、あなたの傍

を離れません。あなたがどんなに無様になっても、面影がなくなっても平気です。

これは、あなたを呼ぶ声と私、どっちがあなたを奪うか根競べなんです。負けませ

んから。

志英 ……、

千賀、志英を車椅子に乗せようとする。女一人の力では難しい。

景達が来る。

景達 手伝います。せーの、

志英を支え、二人で志英を車椅子に乗せる。

景達 旦那様。駅でまた無茶されたんですって？ 勝てっこないのに暴れるなんて、さす

が旦那様ですね。

志英 ……駅前で、分家のやつらにあった。

景達 ああ、久しぶりですね。お元気でした？

志英 言われたよ。笑いながら。「これはこれは、本家の旦那様。お身体、お辛そうですね」。

——なあ、景達。俺たちは間違ったな。朝鮮総督府に気に入られるため日本に留学して。土地と財産を守るため、わざわざ日本人を妻にして。どうせ徴兵されるんで

も日本人と同じ将校クラスで切り抜けて。だが結局は全部無駄だったわけだ。いくら日本人でも、子を産まないんじゃないやな。

千賀 ……あなた、

志英 おまえをもらったばかりに、本家の血は途絶える。

景達 旦那様、言いすぎです。

千賀 ——、

志英 間違っただんだ。朝鮮の女を貰えばよかった。

あつえ あんまりです。

あつえ、景達が汲みに行った桶を持って戻ってきている。

あつえ 子供を女だけのせいにしないでください。そんなに許せないなら、今からでも離縁してどこぞの女を好きに貰えばいいじゃないですか。千賀さんなら日本に戻って幾らでも幸せになれます！

あつえ、書類を取って来る。

あつえ 日本に帰れるんです！ さっき日本の人が来ました。国交が回復したから日本に帰れるって。なんとかってお役人がこれ置いていきました。

千賀 (書類を広げ) ——みんなを呼んできて。

あつえ はい。

あつえ、出ていく。

千賀 ……『さて、今回日本人の永住帰国希望者に対し援助の手が差し伸べられることになったことは新聞、ラジオなどでご存じのことと思います。永住帰国の希望がある方は韓国及び日本の戸籍謄本が必要です。あらかじめ用意していただければ、それだけ手続きが早くなります。日本の戸籍謄本は本籍地、父母の氏名が分かれば、当方で取り寄せることも出来ます。在釜山日本国領事館では、韓国政府の法務部と連携の上、国籍の整備や調査、査証(ビザ)の申請に必要な陳述書の書き方を案内しています。貴下のご連絡をお待ちしております。』

千賀が読み上げる間に、ユキ、多満子・潤林、あつえ・達三が、この場を集う。

全員、千賀が読み上げる書類を聞いていた。

多満子 帰れるん？

ユキ ……、

あつえ そう書いてあるんですよ？ ……私たちだけで話しませんか。

景達 ここで話してください。ここで。

千賀 ……帰れるかはわからない。戸籍謄本が必要だつて。

多満子 戸籍謄本つて？ 何なん？

あつえ いっぺんも見たことないです。戦争中でしたし……、

多満子 生き延びるだけで精一杯じゃったけえね。うち、両親も早よに亡くなつちよるし。

あつえ 結婚で韓国の戸籍には入れた？

ユキ 知らん。入れとらんやろ。

潤林 わしも結婚の届け出は出せちよりません。結局、故郷にも帰れちよらんし。

多満子 どうしよう。うち、何も無い。

あつえ 大丈夫。両親の名前さえ分かれば調べて貰えるつて、

ユキ やめんね。期待すんな。……こげな紙切れ一枚。うちは信用しとらん。

あつえ ……持ってきたのは悪い人じゃなさそうでしたが。

ユキ 違う。信用しとらんとは日本。国たい！

あつえ ふるさどですよ？

ユキ 20年もほったらかしにされたとよ？！

あつえ それは、あれでしょう、国交がなかったから、

ユキ ばつてん日本はうちらがここに居ることをずっと知つとつた。知つとつて見らん振りばしとつた。なんで、あの八・一五——四五年の終戦で帰れんかったとが、今になつて帰れるんよ？ うちらあの夏は忘れんよねえ、千賀さん。急に地獄の蓋が開いて、血の池に放り込まれた。

千賀 うん。ひどい夏だった。

ユキ 総督府の役人も引き揚げてく人らも、帰つてく連中みいんな、うちらのこと助けてくれんかったよねえ？！ うち、喉から血が出るほど「帰らして！ 連れてつて！」

あつえ ……つて叫んだとに、みいんな無視した。「朝鮮人と結婚したとが悪い」 っち。

千賀 あの時、帰れるもんなら——ユキちゃんは、帰りがつたね。

志英 おまえも。

千賀 私は！ ……あなたのお帰りを……。

ユキ 必死になつて日本ば捨てて、朝鮮人に溶け込んで。今更、こげなん一枚ペラツと寄越して……！

多満子 ……時間が流れたんじゃね。

ユキ やけん20年！

多満子 そうじゃのうて。数字じゃのうて。——ううん、数字でも長い時間じゃけど、去年の東京のオリンピック。駅前の店がラジオつけちよつたじゃろ？ 開会式、抜ける

ような青空じゃ言いつたじゃろ。あれ聞いて、うちが知つちよる青空は、B29

が飛行機雲曳いて飛んでく恐ろしい空じゃつたけど、もう日本にはそがあな空、ど

ど

ど

ど

ど

ど

ど

ど

ど

ど

ど

ここにもないんじゃないかって思った。飛行機雲が消えたみたいなのに、あの空も消えて、跡形もない。にぎやかな行進曲聞きながら、こりやどこの国のことじゃろうねえって思うちよった。

あつえ オリンピック、朝鮮の選手も参加したでしょう？ ほら、あの話。北の陸上選手の、達三 シン・クムダン。

あつえ そう！ オリンピックに参加して、生き別れの父親と東京で再会できた。私、あれ聞いて涙が出て。六・二五戦争のせいで、北と南で生き別れて、生きてるか死んでるかも分からなかったのに、日本で再会できるなんて。日本じゃそんなことも起るんだって。

ユキ ほんで？ オリンピックついでにうちらのことも思い出したつか？ ああ、そういや朝鮮に日本のアリンコまだおったねえ。あれどげんしたとかいなあつて。

多満子 ユキさん。意地張ってどうするん？ せつかくの機会なんよ！

ユキ ぼってん、戸籍がなきゃ帰れんでしょうもん？ どうせ帰れん。帰れんとよ！

千賀 決めるのは調べて貰ってからにしたら？ ユキちゃんも自分の戸籍、分からないよね？

ユキ ……、

千賀 帰るかどうか、選べるようになるかもしれないのよ。

多満子 うち、明日行きます。朝いちばんに。とつと調べて貰うて、日本に帰ります。

潤林 多満子、

多満子 うちが帰れるんなら、潤ちゃんじゃって行けるじゃろ？

潤林 ——、

多満子 ずつと具合が悪いんは、ピカのせいに違いんじゃないや。日本には偉い先生がおつてピカの患者を治してくれちよるじゃろ？ うちはこの人を日本に連れて行きます。

潤林 ……、（多満子に触れる）

多満子 潤ちゃんは日本人として朝鮮から連れてかれて、日本人として働かされちよるときにピカに遭うたんじゃ。日本人と同じ病院で日本人と同じ治療してもらうんは、当たり前じゃろ。

潤林 ——わし、休んじよるわ。

潤林、立つ。歩き出そうとするがふらつく。

多満子、潤林を支えようと。

潤林 ……、（多満子を見る）

多満子 何ね？ そがあ、じつと見んといて。言つとるじゃろ、あんたは死なんけえ。

潤林 おう。そうじゃ。

多満子 ……ッ、

多満子、潤林を支えて共に部屋へ。

あつえ 私も、明日行こうと思います。

達三、立つ。

あつえ 帰りたいたとは思ってません。けど、北と南で生き別れになった人が日本で再会でき
たんです。……私は、また会えるとは……思えないけど……一五年、ひとり探
しても無駄でしたから、可能性があるなら行ってみます。調べて貰って、あの子が無
事で、元気でいるって分かったら……それだけ分かればいいんです。

達三 それで？ 日本の戸籍も見つかって、帰れるとしたら？

あつえ だから、たちちゃん、

達三 子どもも見つかって旦那も見つかって、日本に帰れるとしたら？

あつえ

達三 その顔で十分だ。

達三、歩き出す。

あつえ 違うの、たちちゃん、私は、

景達 達三。

達三 ……戦前、朝鮮鉄道で働いていた頃、上司が日本人でした。山に線路を通す作業中、
事故があつて、俺は咄嗟に日本人を突き飛ばして庇った。俺だけこうなって、もう
働けないからってクビになって、日本人は俺に一生感謝すると泣いて頭を下げた。
事故のあと、日本人は俺に生活費と治療費をくれた。見舞いにも来た。だが一ヶ月
もしないうち、そいつはさっさと日本に帰った。それきりでした。

達三、去る。

あつえ、達三の背を見つめているが、追えずに別の方に去る。

ユキ 阿呆たい。ふたりとも。期待するだけ辛いとに。

志英 それでも故郷は思い出すだろ？

ユキ うんにや。とつくに忘れた。第一もう、こつちで暮らした時間の方が長いんよ？（煙
草を探すが）——煙草、

千賀 行くだけ行ってみたら。お父さん、今ならきつと、

ユキ だけんうちは、（続けられず）——迷惑な紙切れたい。

ユキ、煙草を探しに行く。

志英 おまえは。

千賀 行きません。

景達 でも奥さま、これで、帰るかどうかを選べるようになるって。

千賀 私はもう選んだから。帰るってことは日本人に戻るってこと。日本のお墓に入るってことよ。私はシオモニ、シアボジ……あなたと一緒にのお墓に入ります。ムグンフアがいつぱい咲くうちのお墓。私はこの家のものなんですから。

志英 ……、

景達 でも奥さま、ご両親のことは？ 東京のご実家がどうなったかずっと気にされていた。

千賀 ……、

景達 空襲に遭われたのか、今もお元気か、ご両親のことだけでも調べてもらったらいかがです？

千賀 ……、（溜息を）

志英 ……景達

景達 はい、

志英 部屋へ戻る。

千賀 あなた、私が。

志英 いい。景達。

景達 はい。旦那様。

景達、志英の車椅子を押していく。

千賀 ……、

千賀、心に決めたはずなのに、束の間足が動かない。

書類を折りたたみ、志英を追っていく。

ユキ、煙草を啜えて戻ってくる。

ユキ （火を点け）……、

声寿が来る。ナザレ園への差し入れの荷物を背負っている。

声寿 よお。

ユキ ン。久しぶりたい。

声寿 ……静かだな？

ユキ そうやね。

声寿 夕飯は？

ユキ あー。

声寿 なんかもあったか？

ユキ まあね……。園長さんなら志英さんとか。

声寿 差し入れ持ってきた。

声寿、荷物を下ろす。ユキ、荷物を覗く。

ユキ お。——なんね、鶏！二羽も！

声寿 明日、イエスさまのお祝いだろ？

ユキ そやったね。……そやったねえ。

声寿 忘れてたのか？教会のくせに。酒くれ。

ユキ ああ……待つとつて。寝酒用の一本だけ隠しとるけん。

ユキ、十字架の台座を探る。

声寿 なんでそんなところに、(酒)

ユキ 志英さん、ここなら見らんけん。神さまに守ってもらつとうと。

ユキ、湯飲み茶碗などを整えに行く。

声寿

たとえば砂金がとれるって噂の川がある。でも砂金なんて採れねえだろ、普通は。さんざん砂掠って、小さい一粒でもありや儲けもんだけど、大抵の朝鮮人は一生掛かってもその一粒にありつけない。自分の運の悪さを嘆くだけだ。でもその川が本当にあるとしたら？俺らはこの身一つで行くだけでいいんだ。仕事は、俺ら朝鮮人がさんざんやりなれた仕事で、行きやあ必ず金になる。金持ちになれる。

ユキ そんな川あると？(茶碗を持って来る)

声寿 だから、たとえば。さつき駅に行ったらちようど帰ってきたやつがいて盛り上がった。「ベトナム行きのバスに乗り遅れるな」ってさ。そいつ、一年行ってきただけで故郷に立派な家建てたつて。いいか、たったの一年。

ユキ、マッコリを注いでやる。

声寿 まあ、あんたはさ、

ユキ ——ねえ？

声寿 あ？

ユキ うちは、なんやと思う？日本人？朝鮮人？

声寿 どっちでもいい。あんたはあんただろ。

ユキ ……

声寿 (酒を飲む) ああ……あんたのマッコリが一番旨い。

ユキ、声寿に口付ける。

ユキ ごめん、なんの話やった？

声寿 ベトナム。……まあいいや。

声寿、ユキを抱く。

12、帰国手続きのための陳述書 ③

多満子 名前？——あんた誰ね。うちらがそんな得体のしれんお人に自分のことペンラベ
ンラ喋る思うたら大間違いじゃけ。あんたはちゃんと話を聞いてくれるお人なん？
あつえ 最初に、嘘をついたことを謝ります。私、北朝鮮生まれの韓国人として、この国の

戸籍を持っています。ですが、それは嘘の戸籍なんです。私、間違いなく日本人で
す。50年の朝鮮戦争の時に、北から南に逃げてきました。韓国は、北からの避難
民に限って、自己申告すれば誰にでも、韓国の戸籍をくれたんです。だから私、日
本人じゃない方があとで子どものためにもいいと思って、達三さん——知人の住所
を借りて、朝鮮人の振りをして登録したんです。ですが、本当の出身地は北海道。
虻田郡豊浦町です。日本の戸籍、調べてください……！

ユキ

……親には両頬張られて勘当されたばってん、お国からは表彰状を貰ったんですよ。
そう、表彰状。「松尾ユキ殿。右の者、朝鮮人との結婚を實行し、内鮮一体の国民総
力運動に関し、他の模範と為す」……うちね、人生で、人様に褒められたとは、後
にも先にもあの一度ッきり。やけん、なんで立派なことしとつとに、父ちゃんに殴
られるんか、全然分からなかった。あん表彰状、どっかに記録残つたらんかいな？
あれ探してくれりや、うちのことも分かりますよ。

多満子

……「原爆症」？……そういう名前があるんじやね。日本人ならお金がなくても
病院に掛かれるんじやねえ？うちの人は、広島で火傷を負って、髪が抜けちよつ
た。火傷が落ち着いて、髪もまた生えて来たけえ、こっちに渡ってきたんじや。で
も、やっぱり元には戻つちよらんかった。六・二五戦争の最中に腹が痛い、痛いつ
ちゆうて戦地から戻つてきて寝付いとつた。最初はゲボリン——痛み止めだけ飲ん
でやり過ごそうとしちよつた。けど、腹は治らんし、力も入らん。物も食えん。じ
わじわ死んでいっちよる。お願い。時間がないんじや。うちが日本人なんは間違い
ないけえ、一緒に帰らして。ほんまの親切ちゆうなら、日本人より先に、日本人
のために働いとつたよそのお人を助けるべきじゃろ。ね、助けてつかあさい。

千賀 ……じゃあ、東京の大空襲で、うちは焼けたんですね。

寺嶋、来る。

寺嶋 はい。私も日本に引揚げたあと、お宅を訪ねてみました。でも正確に言うと、お宅がどこにあったのか分かりませんでした。あたり一面……。でも、避難されていてご無事ということもある。まだ気を落とされるには早い。

千賀 ……ええ、調べていただけますか？

寺嶋 それにしても、こないだ駅で物を売っていたのが、あなた方だったんですね。千賀さん、間違えました。

千賀 二〇年、ここで生き抜いてきましたから。……それでも、なんだかんだ、父の言葉には背けずに……。おかしいでしょう。私、父の娘として、日本人として、立派な朝鮮人になろうって……。

13、慶州 1966

6月末、夏の初めのナザレ園。

寺嶋、来る。戸籍の照会結果を持って訪ねてきた。

景達、志英の車椅子を押してくる。

景達 안녕하세요……こんにちは。

寺嶋 こんにちは。日本の領事館の者です。

景達 ようこそ。ナザレ園へ。あなただったんですね。久しぶりだ。

寺嶋 ……、

景達 忘れましたか？ あなたに撃たれた腕、雨が降ると今も痛い。

寺嶋 その節は。……皆さんは？

景達 今、仕事に出ています。もう戻るでしょう。

寺嶋 待たせて貰います。

景達 どうぞ。——어르신, 보리차 갖다 드릴게요. (旦那様、今、麦茶を)。

景達、志英の車椅子を止め、湯飲みと麦茶を用意しに出て行く。

達三、潤林に肩を貸し、歩いてくる。

達三は潤林を座らせ、身体を拭いてやる準備。

寺嶋、男たちの様子を観察している。

景達(声) それで、今日は？ また拳銃をお持ちですか？

寺嶋 いえ。

景達(声) でも、あなたが来るとロクなことがない。

志英 日本の戸籍が見つかったのか？
寺嶋 そうですね……結果はお持ちしました。あの、この園長の姜景達さんというのは、あなたですか？

景達、湯飲みと麦茶を持って戻ってくる。

景達 私ですよ。

寺嶋 ……昔はただの家作でしたよね？

志英 この者の主人、李志英だ。うちの者が何か？

寺嶋 なるほど……あなたが千賀さんの。すると、やはりここは、昔伺った屋敷。

景達 屋敷は焼けました。ここは、豚小屋でしたがね。

寺嶋 失礼ですが、ナザレ園とは、なんですか？

志英・景達・達三・潤林、今や警戒心を持って寺嶋を見ている。

景達 何って？ 教会ですよ。

寺嶋 教会として正式な認可は受けてるんですか？

景達 認可？ ……認可？（笑う）

寺嶋 ここで、四人もの日本人女性を保護されていたのは感謝します。ですが噂を聞きましてね。

景達 どんな。

寺嶋 ここは女たちを働かせ、その金を巻き上げると。

達三 なにを、

景達 （達三を止め）ご覧の通り病人がいる。介護も必要。助け合っています。

寺嶋 マッコリの製造販売と駄での物売り、ほかには何です？ 近隣の田植えの手伝いや

雑務、なんでも請け負うと。

景達 そうですね。選り好みはしてられません。

寺嶋 花蛇（コッペム）の真似事も？

達三 ああ？

達三、寺嶋に掴みかかる。

景達 달삼아! 영사관 사람이야! (達三! 領事館だ!)

達三 誰がそんなこと言ってる! ここへ連れてこい! 女房を娼婦呼ばわりするな!

あつえ ……たっちゃん、

あつえ・多満子・ユキ・千賀、そして声寿。

駅の販売から帰ってくる。(声寿も販売を手伝っていた)
女たち、寺嶋を見て、調査結果が出たのを悟る。

寺嶋 ……失礼。ですが大事なことです。日本領事館は、日本人の皆さんを——たとえ日本には帰れずとも、安全に暮らせるよう調査しています。

女たち ……。(荷物などを下ろし)

寺嶋 姜さん、はつきりさせましょう。ここを調べるうち、韓国法務局があなたを堤岩里のご出身だと教えてくれましたね。あなたは日本人を恨んでいるはずだ。日本人女性を保護する目的は？

景達 目的……？ おかえりなさい、皆さん。麦茶ありますよ。

寺嶋 答えてください。

景達 なぜ？ 私たちはここでずっと一緒にやってきた。話す必要はない。

寺嶋 話せないのは、後ろ暗いことがあるからですか。収益とこの住環境、釣り合っていないように見えますが？

多満子 それは、治療のお金が掛かるけえ。

千賀 それからお金も貯めています。ここを守っていけるよう！

景達 聖書にこうあります。「汝の敵を愛せ」……信仰を実践してるだけです。これでいいですか？

寺嶋 この方達は、敵ですか？

景達 そうですね。元は。日本人は皆そうでしょう。でも戦争が終わってからは違う。この人達は弱い人たち。誰かが守らなければ。

寺嶋 するとあなたは、ご自分の信仰の実践のために、日本人女性を利用しているんですか？

景達 ……。(笑う)

寺嶋 そうでしょう。敵で、なおかつ弱い。おあつらえ向きの相手だ。あなたは日本人女性を偽善のはけ口にしてる。

景達 ギゼン？ ならあなたに聞きましょう。偽善と善の違いはなんですか？ 最初は確かに恨む気持ちはありました。旦那様が日本人の奥さまをお貫いになれる時、これは、神が与えた試練だと思いましたが、ですが、実際に奥さまと暮らして、お互い愉快に過ごして、支え合って。偽善でも、一生貫けば善になるんじゃないんですか？

ユキ 一生、

景達 ……私も年を取りました。この一生は、日本人と関わり合う運命と思っています。この人たちは日本人。ですが、同胞です。誰か一人でも行く当てがないなら、ここが家になる。

あつえ 園長さん。

景達 これでいいでしょう。わかったら、戸籍の調査結果を教えてください。

寺嶋 お一人ずつにお話しします。

ユキ 大丈夫たい。こちらは話がついとる。誰がどうなっても受け止める。
千賀 話してください。
寺嶋 ……分かりました。

寺嶋、鞆から手帳などを出す。

寺嶋 松尾ユキさん。

ユキ はい。

寺嶋 日本に戸籍はありませんでした。既に死亡届が出されておりました。

ユキ ……そう、やろね……（笑おうと）死亡届……、

寺嶋 昭和一九年に。

ユキ 早かア。うちがこつち渡つてすぐたい。……父ちゃん……っ！

声寿 ——、（ユキを支え）

寺嶋 笹本多満子さん。

多満子 はい。

寺嶋 ご両親が亡くなった後、ご親戚の養女となっていました。既に死亡届が出されてい
ます。

多満子 ……はい……。 （潤林を抱き）

寺嶋 根岸あつえさん。

あつえ はい。

寺嶋 戦争ではぐれたお子さんと旦那さんについて、韓国法務局にも照会しましたが、行
方は分かりませんでした。

あつえ そうですか。

寺嶋 ですが北海道に戸籍は残っており、お身内もご存命だと分かりました。あなたの一
番上のお兄さま、その奥さまからご伝言を預かりました。

寺嶋、手帳から挟んだ紙を出す。

あつえ、開く。

あつえ ——「韓国でお元気との旨、大変嬉しく……ですが、主人は既に他界しており、あ
なたのお知り合いは誰も……帰国したい気持ちは分かれますがこちらの生活も…
…」（紙を閉じる）

寺嶋 身元引受人になっていただくことは可能です。

あつえ ……。

達三 （あつえを労り）——、

寺嶋 風見千賀さん。

千賀 はい。

寺嶋 東京のご両親は、やはり、空襲の際に亡くなられていたようです。

千賀 ……はい。

寺嶋 戸籍はご結婚でこちらに届けられた韓国籍のほか、日本にも残っています。二重国籍の状態です。

千賀 え、

寺嶋 遠縁の方が、一時的な身元引受人になることを了承しています。

千賀 ……あの、それはどういう…、

志英 結婚するとき、娘をよろしくと笑って送り出しておきながら、籍は抜いてなかったのか。…、(笑い)

寺嶋 調査結果は以上です。根岸さん。千賀さん。もし、帰国の意志があれば、

多満子 待ちんさい！ ……それだけ？ うちらには？

寺嶋 ……戸籍裁判を起こすという手は、

多満子 日本は何もしてくれんのん？！

寺嶋 国としては、基本条約に従い、韓国政府に対し協力を、

多満子 どうでもええわ。どうでもええんじゃ！ 潤ちゃんを——この人をどうする気かって聞いとるんじゃ！ 言うたじゃろ、この人は、

寺嶋 そちらの方が本当に広島にいらしたのか。原爆に遭われたのか。証拠はありませんか？

多満子 ……証拠？

寺嶋 お身内以外に証人はいらっしやいますか？

多満子 証人で、こつちにおつたら何にも…！！

寺嶋 日本政府は、現時点では韓国に原爆被害者がいることを確認しておりません。

多満子 そがあなわけあるか…っ！？ あがあにようけえ朝鮮人連れてっというて？ あんたらに人の血は流れちよらんの？ 情けはないん？

景達 あなたがたは、偽善さえも示さない気か！

寺嶋 協力を払うと言ったでしょう！ 日本と韓国は戦争をしていない、だから賠償金を支払う義務はない。それでも賠償の意味を込めた協力を払うと言ってるんです。国家予算に当たる額だ。それをどう使うかは韓国政府が決めることです。

多満子 国と国のことなんてどうでもええんじゃ！ うちらは…！！

潤林 多満子。どうせ期待はしちよらん。そんなだつて、どうもできんのじゃろ。

多満子 潤ちゃん、なして諦めるん？！

潤林 諦めちよらん。戦つとるんじゃ。

多満子 じゃけえ、

潤林 たとえそん人を殺したところで、どがあもならんじゃろ？

多満子 ——、

潤林 ……わしは、日本を憎んじよる。じゃが憎しみに飲み込まれて死んでくんはごめんじゃ。わしの人生はそがあもんじやなか。……わしがまだ広島におる時——47年

か8年か——仲間から朝鮮の新聞が回ってきたんじや。そこに日本に留学しちよつた朝鮮人学生の詩が載つとつた。

多満子 尹東柱じゃね——、(ユン ドンジュ)

潤林 そいつは45年に、あんたらの治安維持法で捕まつて福岡刑務所で虐殺された。

多満子 ……「死ぬ日まで天を仰ぎ 一点の恥もなきことを

木の葉を震わす風にも 私を誓った」

潤林 「星を歌う心で すべての死んでいくものを愛し

私に与えられた道を 歩いていかねば」……、

日本に侵略されんかつたら、わしは朝鮮から動かんで、ここで嫁さん貰うて子供らと田植えでもしとつたじやろう。でもわしは、この人生を、捨てたもんじやなかつた思うちよる。どがあひどい目に遭うても、こがあな美人が惚れてくれて、故郷を捨てて来てくれたんじや。幸せで釣りが来よる。

多満子 ……潤ちゃん、

潤林 国と国の間で殺されていってもわしらは人間じや。最期まで人間らしく生きようと戦つとるんじや。たとえ日本がわしを認めんでも、わしや原爆症じや。そんなことだけは忘れんとつてくれんかいのう？

寺嶋 報告、しておきます。

声寿 国交が回復して時間が動き出した。あんたらはもう、俺たちを無視できない。

寺嶋、手帳などを仕舞い、帰り支度を整える。

多満子 ……寺嶋さん。そんでもうち……一言だけ欲しい。

寺嶋 ……、

多満子 潤ちゃんに謝つてや。

寺嶋 ……、

多満子 あんたが関係ないんは知つちよる。あんたのせいじやない。けどこの人は、——ここにおるみんな、日本が起こしたことの犠牲者じや。せめて、えらい苦勞かけたて謝つてや。

寺嶋 でも私は……、

潤林 多満子、

千賀 ……八・一五。あの真昼、玉音放送を聞きました。これが天皇陛下のお声かと思いました。天皇陛下は私たちに謝つてくださらなかつた。日本という国は、これまで誰一人、私たちに謝つてくださらなかつた。誰の責任とか、国のこととか、そんなのはいいんです。ただ誰か、分かってくれてたら……。私たちは顔が欲しい。日本のことを口にするとき、思い浮かべる顔が欲しいんです。私たちが覚えてくれてる人が……。

ユキ あんたが約束して。うちらば忘れんつて。そしたらうちらは、あんたば信じる。あ

んたばうちらの日本にする。

あつえ それとも、ここを出たら、私たちを忘れますか？

寺嶋 —— 忘れません。……プラットホームであなたがたを見たとき、あなたがたを朝鮮人だと思いました。あなたがたがこの地で、どんな年月を過ごししてきたか、分かっ
てなかった。(男たちに)……あなたがたの痛みとつらさも知らずにいた。……知っ
てはいたが考えずにいた。……すみませんでした。……あなたがたは、生きていて
くださった。

ユキ ……うん。

寺嶋 ……帰国の意志が固まりましたら領事館にお越しく下さい。それでは。

千賀 —— (会釈)、

あつえ お世話になりました。

寺嶋、出て行く。

あつえ、親族からの伝言の紙を細かく破り、捨てる。

あつえ お夕飯の支度しましょうか。

あつえ、荷物を持つところ、達三、替わりに持つ。

達三 骨付きの豚は茹でてある。料理は決めてくれ。

あつえ わあ！ 何がいい？

ユキ カムジャタン！ うんと辛くして！

達三 いいな。

あつえ ね、たちちゃん。私から言ってもいい？ 結婚しよ。

達三、荷物を派手に落とす。

ユキ・声寿・あつえ、笑って荷物を持ち、炊事場に行く。

多満子・潤林、支え合って部屋に戻る。

景達、志英の車椅子を押す。

景達 風が出てきましたね。部屋へ戻りますか？

志英 千賀。

景達、志英の意志を汲み、車椅子から離れ、炊事場へ去る。

志英 ……。

千賀、志英の車椅子の傍、膝元に寄り添う。
志英、手を伸ばして、千賀の頬に触れる。
その顔をしっかりと見る。

志英 久しぶりにおまえの顔を見た気がする。皺が増えたな。

千賀 そりゃあ、

志英 でも、まだ若い。

千賀 ——。

志英 おまえを離縁する。

千賀 ……嫌です。

志英 ずっと日本のことを思い出してた。お父上の病院、お前に会えなくなるのが嫌で、怪我がずっと治らなければいいと思った。結婚の挨拶に伺った日、座敷に通されてご両親を待つ間、庭を見てたな。満開の木蓮の花。……おまえはお父上、お母上に愛されていた。それを俺が掠ってきた。おまえはアボジとオモニを看取ってくれた。でもお父上、お母上は、誰にも吊われず、あの場所で待ってる。

千賀 ……あなた、

志英 景達にはもう伝えてある。おまえの戸籍が見つかれば、日本に帰すと。

千賀 勝手に決めないでください！ 言ったでしょう、ここが私の家だって、

志英 家長命令だ。夫が妻に命ずる。……世話になった。

千賀 ……아이고……! 어보……사랑해요……! (アイゴ……あなた……愛してます)
志英 朝鮮の女みたいだ。(千賀を抱き)……アボジとオモニに報告に行こう。酒を持ってきてくれ。

千賀、志英から腕を解かれても動けない。

泣いているが、やがて、酒を取りに去る。

志英 ——、(千賀の背を見つめ)

志英、車椅子をひとり動かし、外へ出て行く。

千賀、酒を持って戻ってくる。

既に志英の姿はない。

千賀 ……あなた？

風が吹抜ける。

声寿・達三、千賀の様子に走り出していく。

声寿(声) 旦那様！ 旦那様が……ッ！

千賀、へたりとその場に座り込む。

景達、出て行く。

ユキ・あつえ、多満子と潤林、急ぎ出てきて行方を見つめる。
泣き始める千賀の声を風が掻き消し――。

*

声寿・達三・潤林、白い布を掛けた柩を運んでいく。

景達、静かに祈りを捧げ、女たち、棺を見送る。

風の中、かすかにアリランが聞こえる。

♪ 아리랑 아리랑 아리랑 아리랑 고개로 넘어간다……。

14、プラットホーム 1966

荷物を持って出てくる声寿、ベトナムへの旅立ち。

達三、潤林を支えて来る。潤林、声寿に帽子を渡す。

達三 성수야 죽지 마. (声寿。死ぬなよ)

声寿 응. 금방 들어올거야. (ああ。すぐ戻ってくる)

潤林 무사하시길……. (〇無事で)

声寿 너도 잘 있어. (おまえも、元気で)

日本への旅支度をととのえた千賀、来る。

ユキ(声) 千賀さん！

ユキ・多満子・あつえ・景達、千賀への餞別を持って来る。

ユキ これ、持っていく。

千賀 ありがとう。

景達 성수야, 힘내. (声寿、しつかりな)

声寿 삼촌, 다녀오겠습니다. (おじさん、行ってきます)

景達 ……奥さまの煮付け、食べられなくなりますね。

千賀 煮付けならみんなが作ってくれる。うちをよろしくね。

景達 一生懸命働いて、あの土地を買い取ります。

声寿 俺がベトナムで稼いできます。戻ったら、大きな家を建てましょう。

あつえ 私たちの家。日本と朝鮮の間、ここで生きる人たちの。

多満子 たぶんまだ隠れて暮らしちやる女がようけおる。うちら、探してみよう思うて。

ユキ 今度はうちらが声ば掛ける。千賀さんがうちに声掛けてくれたみたいに。
千賀 うん。ありがとう。
声寿 釜山までご一緒します。
景達 奥さま。お幸せに！
千賀 姜景達。みんなを頼みます。
景達 約束します。針千本。……なんで針を千本も飲みます？

出発間際の汽笛が鳴る。

ユキ うちらここにおるけん。あんたらを想つとるけん！ 帰ってきて。
千賀 ……、(動かない)
声寿 荷物、運んでおきます。

声寿、千賀の荷物を預かり、汽車の中へ向かう。
達三・潤林、声寿を見送っていく。
動かない千賀を女たちと景達は見守る。

千賀 ……行かない。ここにいる……！

ユキ、千賀を抱く。

ユキ 잘 가요.(さようなら)
千賀 ……잘 있어.(さようなら)

千賀、列車に乗り込んでいく。
再び汽笛が鳴る。

15、新宿 1968

1968年10月21日、新宿、路地裏。23時頃。
路地裏にまで響くデモ隊の声。どこかで警察の警笛。崩されたデモ隊の学生が指示系統も失い、散り散りに逃げてくる。
「ベトナム戦争反対！ 反対ーッ！」「先輩、合流地点！」「一号館！ 一号館！」……。
ビルの谷間、光の届かない暗がりにある段ボールハウス。
そこに小さくなって座っている浮浪者の女、風見千賀。
学生たち、女にも段ボールハウスにも気づかず走り去る。
寺嶋隆一が来る。

寺嶋 探しましたよ。おい。……おい。

寺嶋、千賀を確かめる。既に冷たくなっている。

寺嶋 千賀さん、生きてたのにな。あんなに生きてた。

寺嶋の記憶に、鮮やかに眠る朝鮮半島の遠い光景。

*

埃まみれで悪臭のするプラットホーム。

満員の貨物列車に向かい、物を売る女たち。

ユキ 막걸리 어때요? 맛있는 막걸리! (マッコリいかが! 旨いマッコリ!)

多満子 물 있어요 시원한 물! (水あるよ。冷たい水!)

あつえ 김밥! 김치도 있어요! (握り飯! キムチもあるよ!)

千賀 담배 사세요. (煙草いらない!?)

列車の出發を告げる汽笛、大きく鳴る。

女たち、出發間際まで最後の商売に精を出す。

その地に立つ女たち、男たち。

紫煙の中に消えていく――。

〈了〉

韓国語翻訳・監修 洪 明花

劇中引用 尹東柱「空と風と星と詩」序詩